
赤い心臓

はまな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い心臓

【Nコード】

N1661S

【作者名】

はまな

【あらすじ】

赤い心臓。赤く、中に何かの液体が詰まった風船のような球体。大切に抱えられ、投げ捨てられ、奪われ、隠され、暴かれる物。

「赤い心臓」というアイテムを軸に、様々な意識が飛び交い、日常の乾いた恋愛や、町で起こった事件、過去と未来での争いや策謀と、様々な出来事が起こる。

赤い心臓とは何か。一つ一つ別々の舞台・テーマをもった短編によってその正体に光が当てられていく。

短編連作で、どこから読んでも大体大丈夫なお話です。

1 赤い心臓（前書き）

書き忘れ！*この作品のダンスショーですが、実際に友達と観に行った経験・そのときの公演をモチーフというか祖形？にしています。なんで完全オリジナルでもないのかな？

おいこのダンスのあれこれ俺知ってるぞコラ、って人、ごめんなさい、実際あったダンスショーのことを元に書いてるんです。人物・話の流れ、色んな設定などはフィクションです。

* この小説は、短編連作？ 形式にしようと思っております。ですので、形式上連載作品になってまとまっていますが、どの話から読んでいただいても多分大丈夫かもしれません。

1 赤い心臓

1 赤い心臓

長谷公彦は、グレン・グールドを知っていた。ただし、名前といくつかの瑣末な情報だけではあったが。彼が知っていたのは、つまりこういう事柄だった。グレン・グールドは非常に有名なピアニストであるということ、演奏中ハミングする癖を持っており、録音の際何度も注意されたらしいのだが止めようとはせず、そのため彼の弾いたピアノ曲は少し聞いただけでも彼の演奏だと分かったりするということ、非常に顔立ちが良いということ——そんな事柄である。色々とは誤りはあるかもしれないが、真実も多い。

だが公彦は一度も彼の曲を耳にしたことがなかった。公彦は文化全般に中途半端に疎く、特に音楽に関しては長めの距離を自分との間に置き、それを締めようとはしなかった。

そのはずが、今現在、彼はグレンの鼻歌の混じった演奏を聴いている。それはぞっとするほど美しかったし、彼の勝手な内面的感覚はそのピアノの音を冷たい、何か冷えた髪束のように感じていた。

公彦は久しぶりに自らが音楽によって激しく動揺していることを自覚していた。動悸が早まり、唇が乾いていた。

更に、彼をそうして興奮させる物は、ピアノの音だけではなかった。公彦は椅子に腰掛けたまま、瞬きもせずじっと舞台の真ん中辺りにいる人間を見つめていた。正確には、人間の体を、見つめていた人間と、人間の身体。異なる物であるものの、しかし全く別物でもない。その曖昧さが、公彦にある事実を強く想起させたのだった。

（ああ——）

ほんの少しだけ開いた口の端から息を洩らして、彼は心の中で呟いた。

（俺は、人間で——人間の体だ）

高校の卒業式の日。公彦も他と同じく、それを三度経験した。そのうち、特別な日は一つだった。自分の卒業の日ではない。二つ上の先輩が卒業する日がそれだった。

桜川時子は、いつでも背筋の伸びた吊り目の女性だった。彼女と公彦は古くからの知り合いだった。公彦が中学三年の時、彼は時子に長めの話をした。自分が長らく時子に懸想していたのだということとを、正しく伝える為の話だった。

「どうして」

高校二年だった時子は、いつもの聡明さに似合わぬ戸惑い顔でそう訊き返した。公彦は、大きな目の靴の中で萎えそうになる足を必死に叱咤し、その場に立ちとどまりながら返答した。

「どうしてでもです。最初からそうだったし、これからもそうだと決まっている様に感じます」

「決まっているように？」

「僕は——どうしてか、どうしようともなく、時子先輩が好きです」それはほとんど彼の中で唯一無二の感情であつたと言って良いし、人を根本から好きになったこともそれを告げたことも唯この一度きりだった。

ただ、彼はまだ中学生で、その言葉も拙かった。彼は、時子无条件に好いていた。彼女を分割することなく——つまりは、彼女のもつ要素と無関係に彼女を好いていた。

「公彦——」

時子は、俯いていた。何かに耐えるような表情を浮かべていた。実際、彼女は耐えていた。

「私は……」

ゆっくりと時間をかけて、彼女はいくつかの言葉をつなげていった。

「そんなこと、かんがえたこと、なかった」

とても大切な後輩だと思っていたけれど、大事な友人だと思っ
ていたけれど、それ以外のことなんて。

「ごめん」

そういうの、分からない、と彼女は締めくくった。

時間の底から響いてくるような、寒くて硬い声音だった。

結局それから二人が付き合うことは無かった。時子は高校を卒業してたった数日後に日本を発った。一年ほどを海外で過ごすということだった。その話を時子本人から聞かされたとき、公彦は体中の血が固まって、自分の体から親しさが消えるような幻を感じた。

その話を聞いたのは周りにはいくつか民家があるだけの、寂しい道だった。そこは彼と時子が二人とも使っている通学路で、幾度となく通った事のある場所だった。

高校で一年同じ校舎で過ごした後、時子は卒業した。卒業して、外国へと旅立った。帰ってきてからたった半年で、時子は大学の同級生と付き合い始めた。

そんな別れは、そこかしこにあった。公彦は高校で多くの友人を作り、その全員と自然にメールの一つもかわさなくなった。大学に入ってすぐに始めたバイトでは、同年代の友人に加えて多くの大人と親交を深めた。一年続けたそのバイトを授業が忙しくなったために辞めて半年で、またも誰とも連絡を取らない状態になった。一日の間には何人かの他人と話し、いくらかの笑顔を見せたり見たりして、一週間ではそれが七日分に増え、一ヶ月経てば知り合いが増えている。更に数ヶ月経つと、それが傷跡を残さず自然と消えていく。鮮明な別れの記憶は、時子とのものだけだった。公彦は誰とでもすぐに親しくなり、誰も悪くないままにその全員と関係を途絶えさせることになっていた。

何故そういった人間関係しか持たないのか、持てないのかは、彼

自身にも分からなかった。恐らく、どの過去に関係した人間であれ、続けようとすれば続けることの出来た関係ばかりがそこにはあったように彼は感じていた。だが、結局いつの間にか顔を見なくなり、声を聞かなくなり、思い出さなくなる。

深く考えているようで、実際のところ自分は反射的に行動しているだけではないのか――。

公彦は時々そう思う。たった一年、時子が外国へ行ってしまったこと、それに自分の想いが自分の望む形で成就しなかったこと、それだけのことが、しかし彼の意思や、意志を司るシステムそのものを一変させてしまったようだった。

自分が誰が必要としていないのだと、かれは自覚していた。だれも、彼女ほどに好きじゃない。『特別好き』でないから好きであってもどうでもいい。

「それに」

どんな人であっても、自分の願いは叶えられない。

*

自宅の1Kに、「亡き王女のためのパヴァーヌ」がざらついた音質で響いていた。普段電話に煩わされるのが嫌いな公彦が、かかってきても気がつかないようにと穏やかな曲を探した結果チョイスした物だった。

だがその日、というか毎晩彼はテレビもつけず静かに本を読んでいたので、心の表面を指先でなぞるようなその曲はしっかりと耳に届いてしまっていた。

床に直にひいた布団から身を起こして液晶を確かめると、時子からだった。

「三年……」

思わず声がでていた。公彦が高校二年に進学した時時子は海外へわたり、それ以来彼女が帰国してから連絡は取っていなかったし

時子の側から連絡されたことも無かった。

電話を握りなおして、ボタンを押し込み耳に当てる。

『もしもし』

懐かしかった。その声を聞いた瞬間だけ、生活感の無い部屋や一度も使っていないキッチンなど、おざなりにしていた生活の細かな部分が冷たい敵意を送ってくるような気がして、彼は身震いした。

「……先輩？」

『公彦。久しぶり』

優しく丸みがあつて、かつどこか俊敏さや透明感も感じる声。変わっていなかった。

『突然ごめんね。ちょっとした用事があつて。今、大丈夫？』

「はい」

『そう。ありがとう。……いきなりで、驚いた？』

「勿論、驚きました」

ふふ、つとくすぐつたい笑い声が携帯のスピーカーを揺らした。公彦は電話を持った姿勢のまま固まっていた。声に震えが出ないように意識するのがやっとだった。

『三年ぶりだもんね』

それからいくらか、時子は自分の近況について話した。海外の話、帰ってきてからの話。大学での研究の話。その中に付き合っている相手のことなどは、勿論含まれていなかった。

『公彦は？ どうしてた？』

「どうって……」

しばし迷った後、軽く頭を振った。

「別にどうって話はないですよ。大学行ってバイトして、それだけです」

時子は、なにそれ、と笑って、そのあと軽く咳をした。ほんの少しだけ間が空いて、彼女は切り出した。

『あのさ、これも突然なんだけれど』

来週末土曜、空いてる？

やや緊張気味にも思えるような声で、そう問われて、公彦は戸惑った。休日はたまにバイトが入る程度で、暇な日が多かった。人付き合いが短期間で終わる為だ。

三年ぶりに――？

『あの、公彦？』

今更ながら、名前で呼ばれていることに違和感が拭えないことに公彦は気がついた。今はもう、あの頃から三年も経ったというのに「空いてますよ」

『そう。良かった』

ほっとした音というものがあれば聞こえてきそうだった。

時子はあるイベントの名前と詳細を公彦に告げた。二人でそれに行こうと、最後に提案した。

「いいですよ」

口が答えていた。何かはつきりと意識して考えるよりも先に。

（反射的に生きてるだけじゃないのか――）

考えながら、彼は会話が終わり通話が途切れた電話を、やや遅まきながら耳から話した。

時子が誘ってきたのは、ダンスショーだった。

コンテンポラリーダンスという言葉は、一体どれくらいの人間に認知されているのだろうか。少なくとも、公彦はそんな言葉をこれまでに聞いたことがなかった。更に言えば、それは彼にとってネットや辞書で調べてみても尚良く分からない言葉の一つでもあった。（なんだか、急に世界がうねったみたいだ）

高校二年以降、静かにだらだと、それはそれで心地よいと感じていられるような固着した空気のような物の中で生きてきていた。目先のことを一生懸命することが何となく馬鹿馬鹿しくて、大きな物事を考えつつも、だからといって自分の人生そのものを精力的に幸福に導こうともしない。それが、公彦のここ三年の過ごし方だったのだ。

何か目的があるわけでもない。何か鮮やかに幸福が感じられるわけでもない。ささやかで刹那的な幸福を読書で味わいつつ、ひたすら時間をすごすこと。それが、一番楽だと彼は感じていた。

そのはずが今彼は、ある意味鮮やかで、彼の生活を支える安寧を崩しそうな気配を秘めたお誘いに、穏やかならぬ内心を抱えていた。休日の都市部、二番目に大きい駅は、その片隅に都市特有の気だるさを残しつつもおおむね活気だっていた。

JRと私鉄と地下鉄が入り乱れる駅の中で、彼はJRのホームに立っていた。ポケットの中の携帯が振動し、取り出してみると時子からのメールが入っていた。

ごめん 電車乗り遅れ。 その約束の電車には間に合うから、
待ってて。 駆け込む！

（絵文字とか、今も使わないんだ）

しばらく、メールの内容自体は頭に入っていなかった。ただ三年前と同じに時子がメールでは基本的な文字と記号しか使わないことにじつと意識を傾けていた。

メールの通りに、彼女は約束の電車に間に合った。発射する寸前に階段を駆け下りてホームの彼に向かって笑いかける姿が、随分大人らしい容姿へと変わってはいたものの、昔の面影も強く保っていることを見て取って公彦は少しだけ見とれた。深い藍色をしたワンピースの裾が揺れて、その中の足が綺麗にテンポ良くステップを踏み、彼女は彼に近寄った。

そのまま二人して挨拶する間もなく電車に乗り込む。中途半端に混んではいたが、二人して何とか座席に座ることは出来た。

「いきなり誘って、吃驚した？」

息を整えて、時子が軽く公彦へと顔を向けた。

「ごめんね。こういうの、誘う相手いなくなっさ」

「彼氏は？」

言ってしまったから、公彦は後悔した。なんだこれ、久しぶりに会って、あてつけかよ——そう思ったが、遅かった。え、と喉の奥を鳴らして、時子は顔に疑問符を貼り付けていた。

「何で知ってるの？」

「ああ、いや……」

公彦は口ごもり、一度目を閉じて空けた後に、観念して白状した。
「そっちの学校に、岡昌広って人、いるでしょう。先輩の一つ下の
その人と、半年前まで同じ場所で働いてたんです」

「岡、えつと、ああ、文芸サークルの……」

眉を寄せて、彼女は記憶を探ったようだった。やがて、やや曖昧
ではあるものの合点がいったようだった。

「あんまり親しくは無かったけど……。彼から聞いたって事？」
「ええ」

答えてから、公彦は少しばかり慌てて後を続けた。

「いや、こちらからあれこれ訊いた訳じゃないですよ。ただ、お互い共通の知人がいるってことが分かってその流れで岡さんの方が
勝手に」

「ああ……彼、おしゃべりっぽいものねえ」

ふ、と息を吐いて、時子は納得した。大きめの瞳を正面にもどして、窓から景色を眺めた。

しばらく、二人とも口を開かなかった。窓の外の景色は十分ほど
で都市部から住宅街へと入り、その後すぐに山の中に入った。たった二十分弱で驚くほどに自然豊かな景色に包まれ、なんと無しに公彦は現実感の欠落を感じた。隣に昔からの想い人がいて、あれから三年もたっていて、自分の知らない外国に時子は一年も住んでいた……それら全てが悪趣味な嘘のように思えた。だがその幻想に切れ目を入れるように、小声で時子が呟いた。

「あのさ」

「何です？」

「怒ってない？」

一瞬、公彦はどう返事したものかと戸惑った。怒る。そんなことは、考えたことも無かった。

「怒るってそんな、何をです」

「私さ」

揮発しないアルコールのような——ひんやりとしながらも、どこか熱を持った透明な声に、公彦は思わず彼女の方を見た。時子は変わらず外を見つめていた。流れゆく景色の中の木々や遠くの山々の稜線、空との境目が彼女の眼球の表面を滑っていた。

「今、同じゼミの人と付き合ってるの。それはとても楽しいし、楽しさや嬉しさ以上に、なんていうか——」

短いトンネルに入る。時子の顔が、影に隠れる。

「ほっとしてる。海外から帰ってきて、今の彼に会って、分かったわ。公彦の言っていたこと」

「俺の？」

「公彦、自分のこと、俺って言うんだ」

「……………」

そういえば、昔は違った——自分が自然に一人称を変えていて、それは当然時子が知るところではなかった——そのことに、奇妙なほどに公彦は悲しさを感じた。一瞬だけだが、刺すように痛い何かがある。それは含まれていた。

「どうしてか。どうしようもなく。誰か特定の個人を凄く好きだったということ」

トンネルを抜けて、再び向かいの窓から日の光が入り込む。漂う塵がきらきらと輝きながらゆっくりと目の前を横切っていた。

「公彦、私、あの時は本当に知らなかったし、分からなかった」

「ああ」

「大学に入って、日本に帰ってきてからなの。本当に」

「ああ」

目的地まで半分ほどの場所にある駅に車両が停車した。新たに乗り込んでくる客はおらず、ただ同じ車両の数人が下車した。

今現在二人が乗る車両の中から、二人以外の人間が皆消えていた。つまり、怒っていないかっというのは、そういうことについて。本当は今日、付き合っているってことを私から話してから訊こうと思っていたんだけど」

「いや、俺が先輩に怒ることって、別に無いじゃないですか」

軽く笑って、公彦はそう言った。実際思ったことだった。

時子は、何とも言わなかった。ただ、景色を見つめていた。

チラシにはこうあった。

『私達は自分の体のことをよく知らない。自分の心臓を見たことのある人間は少なく、それが今も動いている様を見たものは更に少ない。体のことを知り尽くした個人は存在していない。にもかかわらず私達の体は私達の理解や意志とは無関係であるかのように振る舞い、鼓動を続け、生き続けている。生きているとはなんだろうか。体は謎に満ちています。私達は体と戦うのか、体に救われるのか。その謎を、問い掛けを止揚するためには、謎と向き合い、深まり続ける深遠へと相對することこそ必要であると考えます。そのために身体というものを概念・思想からではなく物理化学的側面として分解・理解しダンスを作るという発想が生まれました』

コンテンツラリーというと、公彦には馴染みがなかった。が、このチラシの文章は大いに彼の興味をひきつけた。

「どう？ 面白そう？」

駅に降り立ち、開催場所の文化会館なるものの位置を確かめようと取り出したそれを公彦が見つめていると、横に立つ時子が一緒になってそれを覗いた。公彦が家で宣伝HPから印刷した物だった。

「ええ、とても」

「それはよかった。こういうのさ、何となく敬遠しちゃう人多いんだよね」

「分かる気がしますよ」

鞆にチラシをしまうと、彼はぐるりと辺りを見回した。地方の駅

ということとで小さめの施設を彼は想像していたが、それに反して駅舎は大きく綺麗なものだ。筑後あまり年数もたっていないのだろう、汚れは少なく、磨かれた床面と白い壁が眩しい。JRのホームから建物へと入った場所には街での催し物の広告や聞いたことの無いマイナーな特産品の出店が並ぶ。

人は少なかった。休日の午後ではあるが、出発した都市部の駅に比べれば十分の一以下の人しかおらず、駅の規模と合わさって寂しげな、ともすれば寂れた印象を醸し出している。

公彦と時子は、駅の北口に向かい、バスやタクシーがポツリポツリと並ぶ外へと出た。

「こんなところでダンスショーなんてあるんですね」

町を見て、公彦はそう言った。それほど田舎ではないが、間違っても栄えてはいない。そんなイメージを受ける、ありきたりな風景がそこには広がっていた。背の高い建物は少なく、町は整頓されている反面密度が低く元氣無く感じられてしまう。

「みたいだね。私もこういうの観に行くって初めてだから、なんとも言えないけど」

「初めて？」

「そ。初めて」

おかしそうに、時子は口元を緩めた。

「道は？ どちら分かる？」

「多分こっちの道です。北上すれば国道にぶつかりますから、その辺に会館があるはずですよ」

答えて、公彦は先導しだした。傾いた日差しと凡庸な町並みが、妙に弛緩した空気を漂わせている中、二人は北へ向かって歩き出した。

適当な話をしつつ、公彦は懐かしいものを感じていた。高校のとき、或いはそれより以前。彼女との帰り道、並んで歩いた時の情景が脳裏を過ぎった。

感傷にまみれたままに、彼は十五分ほどで目的の会館にたどり着

いた。

さほど大きな建物ではないが、立派であるといえは立派である。そう言った類の建物だった。新しくも古くも無く、いかにも公的な施設の一つといった感のある場所である。

駐車場を越えて入り口に近寄ると、建物内に入ってすぐの分かり易い位置に受付があつた。近寄ると、色気の無いシャツを着た中年男性が人懐っこい笑みを浮かべて声をかけてくる。

「ダンスショーですか？」

「ええ」

「じゃあこちら、チケット売り場兼受付ですんで。……あと十五分くらいで始まりますよ」

隣を向くと、時子が視線でOKだと伝えてきていた。公彦は男性に向き直り、財布を取り出した。

「二枚お願いします」

「当日お一人様五百円です。はい、はい、どうも」

二人からそれぞれ一枚ずつ硬貨を受け取った男性は、こちらです、と入り口に続く通路を指した後、ああそれから、と言った。

「チケットの端っこに、ここの会館にある喫茶店で紅茶とケーキが頂ける無料券がついてます。良かったら、公演が終わった後にもどうぞ」

二人は顔を見合わせて、チケットを確認した。長方形の紙の右端には、言葉通りにケーキセット無料券がついていた。

「こんなのあるんですね」

「うん。知らなかった」

食い物つきでこの値段か。公彦はどこかで安心しつつ、少しばかり狭い通路を歩いていった。

（なんだろう）

ダンスショーなるものがどんな物かは知らなかったが、その会場に向かうにしては細い通路だった。非常灯のパネルが壁に埋め込まれているほかには明かりも少ない。十何メートルが行った所で通路

は終わり、扉があつた。既に開かれていて、ショーの関係者らしき人が二人を出迎えた。

「どうぞ、向こうです。端のほうはまだ席が空いていますから」

指差された方を向くと、そこには緩やかな弧を描いて扇状に椅子が並べられていた。

「ここって」

時子がすぐに気づいて、床や壁を見回した。

「舞台ですね」

公彦も、同じように眺め回した。そこは少し長細い教室ほどもあるスペースだったが、天井の高さは一般的な部屋の比ではなかった。何階分か上方に照明器具が吊り下がっており、くつきりと舞台上を照らしている。並んでいる椅子の背の側壁は真っ黒い幕に覆われている。その足元には横倒しになった三角柱が並んでおり——普段バックの白い幕を様々な色に照らす為のライトだ——その壁面が舞台の背であることが分かる。

椅子の対面側も幕がひかれていた。バックと同じ黒い幕で、ぱつと見素人にはそこが舞台であることが分かり辛く、またどちらが観客席側であるかはもっと分かり難いに違いない。幕に包まれた舞台と言う物は、想像以上に奇妙な空間だった。

二人は下袖（舞台に向かって左の場所。役者が待機していたりする所のこと）側から、舞台へと入った。

「あの通路、観客席の横をぐるっと回って袖に行くための物だったんですね」

公彦が目を通ってきた道を指すと、時子は頷いて、ほころんだ顔を彼に向けた。

「なんか楽しいよね、こういうの。舞台で何かを観るって新鮮な感じ」

公彦もそれは同感だった。扇状に配置された椅子は、舞台の後方に並べられていた。恐らくは、舞台の観客席側のスペースで誰かが踊るのだらうと思われた。

既に観客が席の大半を埋めていた。公彦達は関係者に言われたとおり、端のほうに自分達の座る場所を求めた。上袖に近い辺りにちようど並んで二つ空いた席を見つけて腰を下ろすと、タイミングを計ったように一人の男性が舞台の真ん中に歩み出た。

「もうじき始まります。皆さん、携帯の電源などをご確認ください」それから数分すると、男はもう一度出てきて、今度は今回のダンス公演の説明を始めた。

チラシにあったような説明もそこで繰り返された。更に、今回のショーのダンスは、グレン・グールドという人のピアノ演奏にあわせて行われるということや、その曲の概要に關しても話した。公彦は全く詳しくない分野の話だったが、男の手触りの良い絹のような話し声は退屈ではなかった。

話はすぐに終わり、男が袖へと退場した。それと共に、舞台の灯が弱まり、椅子のおいてない部分のスペースだけが残されて、他はぼんやりとした暗さに覆われた。

公彦はほんの少しだけ、隣に座る少女——今は女性と言った方がいい年齢なのだろうか——のほうを眼球だけ動かして窺ってみた。彼女は、期待に満ちた、今にも輝きださんばかりの瞳を舞台に注いでいた。そこには、自分が失った輝きの全部が残されているのではないか……そう公彦は感じた。胸が痛んだ。

知らない身体。知らないままで、それでも何十年も生き続ける身体。心ではない身体。

隣に座る先輩。希望的に生きる想い人。自分とは異なる身体。

（俺は）

身体なんて、嫌いだ。目を伏せて彼は心の中で呟いた。

身体が跳ねて、捻じ曲がり、伸び縮みした。

それは、ある種暴力的と形容できそうなほどのインパクトを伴っている。舞台の中央に空けられたスペースを力強く女性が踊る。如何なる既存の形式にもあてはまらないであろうダンスが、公彦達の

前で現出していた。踊り手は見た目から年齢の想像し辛い女性で、深い藍色のローブのような変わった服を身につけている。肌は服の濃い色と対照的に白い。

磨かれた、と形容すべきか、美しくしなやかな筋肉が離れて観ていてもしっかりと分かる。爪先、指先、首筋、背、それぞれの部位で動く筋や腱や骨が、一つ一つの動作をするたびに鮮烈な印象を放つ。

公彦は見入っていた。目の前で披露されているその踊りは、彼にとってほとんど道そのものと言っても良いものだった。普段飽きるほどに見て、接していたはずの身体というものが、今この場では得体の知れない何かに思えた。それほどにダンスは強烈だった。

五分ほどだろうか、踊りは続き、唐突に止まった。踊り手の女性は何かつき物でも落ちたかのように急に人間らしい顔になり、荒い息を整えつつ話し始めた。

「みな、さん、ようこそ」

それまで思い切り腕や足を振り舞台狭しと動き続けていたのだから、息が跳ねてしまうのは当然だった。力の抜けた笑みを浮かべて彼女は観客に一礼する。

「今日は、ダンスショーということで、お集まりいただいていると思います。……ですよね？」

確認すると、手を振って袖に待機しているスタッフに合図を送った。何人かのスタッフが、プロジェクターとボードを用意して、映像を映し出す。

「これは、私達の身体です」

ボードには、教科書に見開きで載っているような、人体の図が映っていた。半分は骨格が、残り半分は筋肉がむき出しで描かれている。「さて、まず、人には骨があります」

彼女は腕を高く上げて、それから手首や肘を一つずつ丁寧に動かして見せた。

「手首は、手首の部分だけでは回りません。こうして——肘から手

首にかけての筋肉が、こう、こうしてその位置を入れ替えることで回っています」

片や肘が終わると、首や鎖骨、腰や足の説明を簡単に行った。それほど難しくは無い、中学校かどこかの生物の授業のようだったが、語り口が軽快且つ滑らかで、退屈を感じさせない喋りだった。インパクトのある「身体」そのものをテーマとしてもつ踊りを見せられた直後であるということもあり、客は皆熱心に聞き入っていた。

「次です」

ボードの絵が入れ替わる。今度は内臓と血管が主体として描かれた人体だった。

「ここが」

とん、と自分の胸の中央辺りを拳で叩く。

「心臓です」

今度の説明は、それだけだった。プロジェクターなどが取り払われ、舞台が元通りになると、またピアノが流れ出す。

透明感の強い楽器の音の間に、微かに男の声が聞こえる。鼻歌だった。

踊りが再開する。

*

公彦は、体が嫌いだった。自分の身体が、その中で脈動を続ける心臓が――。

（ずっと、このまま生きていくだけなのに）

願い叶わず、叶わなかったのだから、その苦痛からなるべく離れて生活する。生まれてしまって、既に生きているんだからどうしようもない。死なないように適当に生きているしかない。

そう言った諦観の元にだらりと生活している時に、心臓の鼓動を感じるのはたまらなく嫌なことの一つだった。自らの意志とは無関係に鼓動を続け、その音と振動を伝えてくる。どくん、どくん、

どくん、どくん。急かすような、責めたてるような、諭すようなその響きが、折角落ち着いている心を乱してくるのだ。

（俺は落伍者だ）

何かとんでもない悲劇があつたわけではない。家族も友人も死んでいない。衣食住全て足りている。一応大学にだって通っているし、病気も怪我もしていない。自殺を考えたことも無い。

だが、そんな自分の状況を幸福には思えない。病気をしようが怪我をしようが、家族友人皆死に絶えようが、自分の幸福も不幸もさほど変わらない。彼はそう感じていた。

今正に悲劇の渦中にいる人間は、眉を吊り上げて怒るだろうか。病院の中で赤子の亡骸を抱えた母親や、爆弾で吹き飛んだ親友の女の子の腕だけを抱えて当ても無く彷徨う紛争地帯の少年。彼ら彼女らは怒るだろうか。

怒るかもしれない。皆、怒るかもしれない。俺は満ち足りている。だが、なのに、そのはずが。

（落伍者だ）

皆、それなりの状況の中で満たされようとする。決定的な悲劇で落伍する者は多いが、それさえなければ基本的には皆幸福を志向する。

それが出来ない。最初の願いが欠けたことで、自分が決定的に満たされないことが、またそれが永劫続くことが確信できてしまった。心臓なんて、止まれば良い。俺が望むなら、それに答えて止まれば良い。勝手に生きている体は、自分の意志とは別物で、その体が生きている限り意識だって生き続けてしまう。

心臓なんて、止まれば良い。

*

どれくらいの時間が経ったのか——踊りの中で前触れは無く、幕が開いた。舞台の、客席側の幕が——緞帳ではなく薄い引幕だが、

それが静かに素早く開いた。

舞台上の観客から見て正面、つまり踊り手がいるほうが、『本来の』観客席側に当たる。舞台の前側の果て、段差になったその向こうに、柔らかな赤色の観客席が階段状に広がり、高く広い空間の床面を染め上げていた。当然今はその客席に座る人間はいなかったが、代わりにあちこちの座席の間の通路に、人影があつた。

それぞれ感覚を空けて、全部で十数名ほどか。少女もいれば、中年と思しき男性もいた。

客席の明かりは完全にはついていない。光量が絞られ、薄暗い。そんな中で姿勢を正し直立している姿は、それだけでも絵画か何かのように見える。

音楽が切り替わった。客席の人影がそれぞれ動き出す。よく見れば、それらの人々は手に小さな丸い何かを抱えていた。一人一つずつ、片手の平に収まるかどうかといった大きさのそれは、一つ一つ色が異なっていた。ただ、どれも暖色であり、青や黒のものは見当たらなかった。いつの間にか、舞台の上の女性も、手の中に赤い物を抱えていた。

舞台上の踊り手の動きと音楽に合わせ、客席の影もまた舞い始めた。舞台上の一人と関連を感じさせるようで、全く別物のようでもある踊りが十数人によって展開されていく。

歳も背格好もばらばらの人々。彼らは服装もまたばらばらであったが、動き易いようにか、あまり厚手の物を着込んでいる者はいない。腕や足や背中の動きがはつきりと公彦達からも見て取れた。

動きそのものは舞台上で一人踊るメインの女性に比べれば荒が目立つ物の、十数人が舞台の客に客席での踊りを見せているというその情景には、どこか異様な迫力がある。

公彦は一人ひとりの身体の動きに視線を張り付かせていた。細身の少女や、がっしりとした青年、全体的に丸みを帯びた中年男性。それぞれの身体が、それぞれの動きの質を見せていた。踊り自体は客席の人々全員が同じ物を踊っているのだが、個人個人の身体の異

なりが、各人の動きの形式でなく内容の玄妙さに異なりを投影しているように感じられる。

やがて――舞台上の女性も客席へと降り立ち、一旦踊りが終わると、今度は最初に今回の公演の説明をしていた男性が低く震える声で何かを読み上げた。いくつか詩のような言葉を囁いた後で、彼はこう説明した。

「人の心臓は――大体大人の物で、約三百グラムといわれます。大きさは握り拳ほどで、ちょうど、あれくらいです」

指差されたのは客席に立つ人々が手に手に持つ色とりどりの風船だった。

「大きさも重さも、大体同じくらいになっています」

そう言って、彼は観客たちに二つほど、暖色の風船を渡して全員にその感触や重さを確かめるように勧めた。順番に風船が客の間を渡っていき、端に座る二人のもとへとやってくる。

「……………」

公彦は、右手にその風船を乗せた。中には何か液体が入っているが、ぴったり容積一杯に詰められており、空気はほとんど入っていない。

「重いね」

時子が呟いた。その言葉通り、風船――水風船だろうか、それは、意外なほどに重かった。大きさは司会の男の言ったとおり握り拳ほどか。公彦の手にすっぽり収まる、やや縦長の球体。ゴムらしきその表面はすべすべとしており、心地よい弾力と合わさって人間に触れているような感触だと、公彦は感じた。

やがて、風船は回収された。司会の男が二つの風船を持って、舞台からはけて袖の闇の中へと消えた。

それと共に最後のダンスが始まった。分かり易いステップなど無い踊り。緩急の差が時に尋常ではなく、見ている人間まで息が弾む。通常意識されざる身体の細やかな部分や、考えても見なかった動き方――そしてそれらがもたらすもの、それが身体であるということ、

誰もが身体である一面を持つということ……。

踊りは、あつという間に終わってしまった。公演自体が一時間以上はあり、そのためダンス自体にもそれなりの時間がかけられていたはずなのだが、公彦——そして恐らくは観客の多くはそれだけの時間をほとんど意識できなかった。それほどにそのダンスは強烈で味わい深いものだった。

踊り手たちが皆舞台上に集まって、中央の女性が締め言葉の口にする、と、一斉に拍手が巻き起こった。観客数がそこまで多いわけではない（席はほとんど埋まっていたが、なにせ舞台上に作られた客席で、数は少ない）のだが、拍手の音は分厚く、そして長く続いた。

公彦は他の人より少しだけ遅れて自分もしっかりと拍手を送った。それが終わると、踊り手たちはばらばらとそれぞれの方向へと散った。片づけが行われる中で、何人かの踊り手はアンケート用紙を配っていた。

「お願いします」

少しばかり呆けていた公彦は、席に座ったままで、差し出された用紙に気がつき反応を遅らせながらも受け取った。隣に座る時子も同じように受け取り、ポケットからボールペンを取り出していた。

公彦もそれに倣い、鞆からシャーペンを手にとって、記入を始めた。この公園をどこでどのように知りましたか？ 今回の公演はどうでしたか？ 良かったところ、悪かったところ、その淹が着いたことをご自由にご記入ください。当会館で他にどのようなイベントがあれば良いと思いますか……

膝の上で鞆を下敷きにして書き込んでいると、時子が口を開いた。

「綺麗だったね」

「そうですね」

「身体、凄かったね。筋肉がこう、しなやかでさ。人の体じゃないみたいだった」

「ええ」

「ほんとに、凄かった……」

感じ入ったように、彼女はふつと息を吐いた。そこに、オレンジ色の何かがにゅつと差し出された。

二人して顔を上げると、そこには最初から舞台上で踊っていた、女性の姿があった。

「心臓です。良かったら、持っていきませんか？」

少しの間迷ったあと、時子はそのオレンジ色の心臓を受け取った。彼女が感触を再度確かめるように、手の中で転がしていると、女性は公彦にも心臓を差し出した。

「どうぞ」

それは、赤色の心臓だった。

受け取ると、彼女はにっこり微笑んだ。少なくとも大人が浮かべる笑顔とは質の違う、明度が高い透き通った笑顔だった。

「ダンス、どうでした？ 楽しめました？」

「ええ……それはもう、すごく」

もっと何か、具体的に言おうとしつつも、公彦は言葉が見つけれなかった。

「良かった。また機会があれば、よろしく願いしますね」

「はい、是非！」

時子が、元気良く答えると、女性は一礼して立ち去った。

アンケート用紙を舞台出口に立つ係りの人間に渡して会館の入り口付近へとでると、外は既に薄暗くなり始めていた。霞みがかつた空の青が、深く濃く変化していく。

無料券で出て来たのは、小さなアイスつきのパンケーキとコーヒーだった。紅茶は切れてしまったのだと、店主は頭を下げた。

会館の建物の端っこの方に組み込まれているその喫茶店は、敷地こそ広くないが上品で落ち着いた店だった。入り口近くのテーブルに向かい合って腰掛けて、公彦達は座っていた。

「公彦は」

コーヒーを、何も入れずにブラックのまま傾けつつ、時子は視線を机の上に落としたままで問いかけた。

「今でも私のことが好き？」

ケーキを切る手を止めて、公彦はしばし考えた後、軽く首を振って溜息をついてから答えた。

「ええ」

「そう」

「どうしてです？」

今度は時子のほうが少し考える番だった。カップを置いて、数秒間じっとしたあと、細い声が返ってくる。

「……他に好きな人は？　ここ三年でだれかそういう人、いなかった？」

「いませんね」

言葉通り、彼は誰もそう言った人物を見つけてはいなかった。多くの人と出会ったが、経験したのは、自然で滑らかな別れ——それだけだった。

「私は、最近になってようやくそういう好き嫌いってものを知った気がする。今付き合っている相手は、そういうことを知るきっかけになったの」

「きっかけですか」

「そう。私は、恋愛って、楽しいイベントで、価値あるもので、だから皆それをするんだし、しないと損だっという空気があるんだって、昔はそう思ってた。だけど、良く分からなかった。誰かを特別好いたことなんて無かったから」

カップの中のコーヒーが、ゆったりと回っている。波打ち、揺らいで、異世界の入り口のようになっていた。

「付き合い始めて——というか初めて誰かに『そういう』好意を持つてみて、何となく分かった。恋愛は、とてもひどくて、容赦の無い——恐ろしいものじゃないかって」

喉の奥に何かが詰まるような感覚が、公彦を襲った。

「無条件に——相手の部分や何かがじゃなく相手そのものが好きだ
つてことは、怖いことで——もっと人間的で暖かい、理性的な関係
の全てに先立つものだと思う。そう、あの時、公彦が言ったこと」
公彦は、唾を飲み込んで、それを口にした。

「どうしてか、どうしようもなく……」

「あの時、公彦がどういう状態だったのか。それも、何となくだけ
ど、分かった気がする。恋するということは、恐らく楽しい物でも
損得でもない、多分それ以前の、その人自身のどうしようもない性
みたいなものじゃないかって」

店内の静けさが、どんどんと鋭くなっていく気がした。外は既に
暗く、窓からはぼつぼつと灯る駐車場の灯りが見えた。

「私は多分、あの時今の私だったら、公彦と付き合っていたと思う」

*

俺達はままならない。それは身体があるせいかもしれない。少な
くとも、自分の場合はそうだ。

公彦は、赤い風船を手にとって、その明るくも暗くも無い色を見
つめていた。

時子は高校を出て海外へと旅立った。一年間。その間、自分と彼
女の間には呆れるほどの距離が開いていた。広大な海と陸は、飛行
機で何時間もかかる距離だった。何千キロだか何万キロだか——そ
うでなくとも、人はたった数十キロメートルの物理的な距離がある
だけでも、コミュニケーションに重大な障害の出る生き物だ。

人工衛星が空を覆い、電波が地上を埋め尽くしても、個人の身体
はたった一つで、瞬間移動も意識の共有も出来ない。一人一つの心
臓がそれぞれ別々の鼓動を続け、他人の鼓動の音は胸に耳を当てら
れる距離で無ければ聞くことが出来ない。

時子が海外に発った時点で。彼女と自分が付き合うことになるそ
の望みはほとんど断たれていたと言って良いのではないか。彼女が

『そういうこと』を知ることになるのは帰国後で、そのときには自分と彼女の間にはある程度の心理的距離が開いてしまっている。そしてそれはある意味で避け様のないことだ。なぜなら——自分と彼女は、別々の体で、別々の意識で、別々の心臓だからだ。

そんなことを考えつつ、公彦は電車の中でじつとしていた。

駅から駅へと揺られている間、時子は言葉を発さなかった。目をあけたまま、暗くてよく見えない窓の外を見つめながら、彼女もまたじつと何かを考えている様子だった。

公彦も、話しかけたりはしなかった。そのまま電車は出発した駅へと辿りついた。

駅のホームを出て改札を抜け、そこで二人は分かれることになっていた。雑踏の行きかう駅の広場で、二人は少しの間夜風に吹かれながら佇んでいた。

「今日は有難う」

時子が公彦へと向き直って礼を口にした。公彦は一瞬だけ眉をゆがめた。三年ぶりの彼女は、ここで一旦お別れになる。彼女に会いたければまたいつか、自分から誘えば良い——だが、そういったことをすることは無いだろうと公彦は何となくそう思った。

「時子先輩」

「何？」

「俺は、多分ずっと好きなままです」

「そう」

「俺は、運が悪かった」

「ええ」

「それじゃあ、さようなら。元気で」

「公彦も、元気で」

二人とも、また、とは言わなかった。

*

風船を握り締めたまま、公彦は家路に着いた。夜道を歩いて、家に着くと、彼は荷物をまとめだした。引越しをしようと彼は思っていた。誰も自分のこと知らない、そして自分も誰のことも知らない町へ行こうと、そう決めていた。

身体があるから、人はいつも不自由するのだ。普段意識しない身体が、心臓が、人と人の間の距離の大元になることがある。それは時に取り返しのつかないものになる。

公彦は、できるなら身体なんて棄ててしまいたいと、そう思った。だがそれは出来なかった。ダンスを見たからだった。

自分が、時子と異なる身体を持ち、別々の「物」として彼女と会い、話し、歩くことが出来てよかったと実感してしまっていた。

身体は、そういうものだったのだ。

彼の手の中では、いつまでも赤い心臓が蠢いていた。

柔らかなゴム風船は、今はどんな精巧な心臓の模型や標本よりも、彼の心臓に近いものだった。

彼はその心臓の感触を充分に楽しんだ後、マンションの屋上から思い切り放り投げた。心臓は、吃驚するほどの勢いで飛び、遠くの家々の間に消えた。

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎〓おれたちのどうでもいいこと

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎〓おれたちのどうでもいいこと

その一

高校二年の夏の日だ。夕日の差し込む美術室は、ひどく気だるく、感傷的になりやすい場所だった。別段深い悩みも明るい希望も無く平坦な生活を送る不真面目な学生には、そういった情景は殊更胸に響く。ような気がする。

いつもは一人で占領している放課後の美術室だが、その日は俺のほかにもう一人いた。美術部の無いこの高校で、好き好んで美術室に入る人間はほとんどいないと言っている。

円陣組んでファイト・オーとかやってる運動部を窓から見下ろして絶対あんな集団の中には入れねえや、などと気ままな孤独を楽しんでいたところにそいつはいきなり入室してきたものだから、俺は描きかけのイラストを一つ台無しにするところだった。演劇部から頼まれて描いていた、劇のパンフレット用の絵だ。

「あ、あの」

びつくりして固まった俺は、何かを口にしようとしているそいつをただ呆然と見つめていた。背の高い女子で、長い黒髪が印象的だった。薄い色の肌が、ひどく紅潮していた。

「私の事、分かりますか？」

戸惑った風に、彼女はそう訊いてきた。

正直、焦った。クラスの三分の一くらいしか顔を覚えていないし、その更に三分の一ほどしか名前と顔が一致している奴はいない。（本気で）自慢ではないが、俺は他人の名前を覚えるのが一番苦手だった。

「えーと、待って、いや、うん」

おれが目を閉じて唸っていると、彼女は少しだけがっかりしたように俯き、しかしすぐにこちらを見た。

「伊藤……です。一年の時、同じクラスだった」

そこまで言われて、記憶が蘇った。背の高さも、綺麗な髪にも覚えがあった。確かに去年は一緒のクラスだった——どころか、半年間席が隣同士だった。彼女はよくうつかりしたミスをする人間らしく、教科書を見せてやったり筆記具を貸してやったり進路希望用紙の提出期限を教えてやったりした覚えがある。人と積極的に関わるといふ行為を忘れた俺が、ここ数年で一番人間らしいやり取りをしていた相手かもしれない。そこまで印象深くて忘れるのか、俺。これが他人の話だったら救いがたい馬鹿もいたもんだと笑うところだが……。

「伊藤、春、さんだ。ずっと隣だった」

少しだけ笑顔の色が彼女の顔に差した。口元が緩み、しかし頬の赤みは更に増した気がした。

「はい」

「いや、その、覚えてはいたんだけどね」

「いえ、いいんです」

複雑な申し訳の無さの中で、俺は久しぶりだな、とかまた背が伸びたのかな、とか悠長に考えて、それからすぐに、その彼女が何でここに？ という疑問が頭の中に広がった。

それはすぐに分かったのだが。

「豊日君」

こちらが何かを質問する前に、彼女は俺の名前を読んだ。少しだけ声が震えていて、彼女独特のしっとりつつふわふわした（どこの菓子パンだろうか）声が、いつもより綺麗に聞こえた。

「なんででしょう」

なぜか敬語になる。彼女の真剣さ溢れる雰囲気完全に俺は圧されていた。

「その……私と、よければ、ですけど」

「はあ」

「……っ、付き合っでは、下さいませんか」

何故かやたら敬語になっている。向こうもか。じゃなく。

「……………」

三点リーダーが頭の中で砂漠の砂のように広がった。実はこのときが俺の人生初の異性からの告白場面で、非常に驚き、戸惑っていたのだ。情けない。

何秒か——あるいは十数秒も経っていたかもしれない。俺は何とか頭の中の砂をどこかに追い出して、声を絞り出した。

「その、付き合っつていうのは、なんというかつまり」

答えは聞かずともすぐに分かった。何せ彼女は盛大に照れていた。非常にウブなのでございますねとおもいつつも俺も同じようなものだった。

「あー、と……」

俺は返答に窮した。

伊藤春は、悪い人間ではない。むしろクラスでは多くの生徒からそれなりに好かれていたように思う。控えめな性格だが暗くは無く、所々で積極性も発揮し、クラス内で安定した評価をつけられ続けている。しかも本人に自覚はなく、天然で好かれるタイプだった——多分。

度々隣の席で助けてやったのも、彼女が「いい人」だ何となく分かっていたからかもしれない。丁寧に頭を下げて消しゴムを返してくる姿などは愛らしいものだった。

西日を受けながら必死に勇気を出して告白したのだと一目見れば分かる。真摯なたたずまいの目の前の彼女は、外見的にもそれなりに良い一般的評価を受けるであろうと思える。

付き合っつて悪い理由が無い。これまで誰かと付き合っつなどと考えたことも無かったが、しかし付き合い始めて分かる価値というものもあるだろう、多分恐らく何となく。

だがそれまで人付き合いを避け、それゆえに肝心なところで思い切りの足りないすかぼんたんな俺は、その場での回答を避けた。

「そのさ、急に言われてなんて言うか……少し、時間が欲しいんだけど」

ああ、もう俺という奴はなんという奴だろうか。タイムマシンがあればあの時の美術室へと飛んで自分の顔に未来の俺の踵をプレゼントトしてやるのに。

「あ、そう、ですよ……！ すみません」

深々と彼女は頭を下げた。俺は慌てて立ち上がり、フォローにならないフォローを行った。ちよつとびくりしてしまって即答できないだけだ、とかなんとか。愚かしいにもほどがある。

結局、彼女とは一週間後同じ美術室で放課後に会うと約束した。期待半分怖れ半分で美術室を後にする彼女の後姿を見つめながらすでに半分俺の心は決まっていたと思う。

つまり、俺も真つ当な人間関係をそろそろ増やしていくべき頃だろう、と。一週間後、彼女が喜んでくれれば回答を先延ばしにしました罪悪感も薄まるだろう、と。

——が。その一週間後の約束が果たされることは無かった。なにせ彼女・伊藤春は、自宅のマンションから落下し頭が割れて死んでしまったからだ。

*

商店街がある。でかい商店街だ。よくニュースなんかで、街の商店街が大型商業施設に圧されて軒並みシャッター街に、なんてのがあるけど、俺の知っているその商店街は間違ってもシャッター街にはならない。

街の都市部、そのごみごみした中心近い場所に、その商店街はあ

る。大型ショッピングセンターは基本的に郊外にあるものだからこいつに競合する敵はいない。

ファッション関連を中心に食事どころやサブカル系のグッズ店、電気屋やそのほかわけの分らない店が立ち並び、大規模なアーケードがずつと続く。メインとなる三本ほどの大通りと、その大通り同士をつなぐ路地からなり、平日だろうが休日だろうが年始だろうが賑わっている。

そんな賑やかな場所だが、元は古くからの住宅が多くあった土地で、今も個人の家々が消えたわけではない。が、さすがに環境が住むに適していないことを誰もが知っているのだろう。そこで古くからの家主は家を取り壊し、土地を有効活用した。

こうして商店街の中にぼつんと一つだけ、買い物街に似合わぬ大きな高層マンションが建った。

十三階建てで、賃貸ではなく全戸分譲制。共同玄関にはオートロックは無論のこと、大きなカメラや生身の警備員すら揃っている。都会の中心のお高いおうち。足元の商店街は、むしろ庶民の香りに溢れているのだけど。

とにかく、そのマンションの八階から伊藤・春（十六歳）は落下した。腰ほどの高さがあるベランダの塀をなぜか越え、頭から真つ逆さまに落ちた。途中五階と二階の壁にぶつかりつつもあまり減速はせず、庶民の渦巻く商店街の表通りから一本だけ外れた、少し広めの商店街内の道路にタックルをかました。

頭が割れて、一目見れば死んでいることが分かる、そんな状態だった。長い身体がぐんにやり腰で折れ曲がり、前衛的な土下座でも開発しているのかと思うようなポーズで彼女は死んでいた。

さいわい落ちてくる彼女にダイレクトアタックがまされた人間はいなかった。すぐに人が集まり騒ぎになった。警察が来たのは結構後になってからだった。

その日は日曜日で、あの夕日の美術室から三日後のことだった。なぜこんなに俺が自殺現場を知っているか。簡単だ。俺はその日

その場にいた。

偶然だった。当たり前だ。俺は彼女とその家族——両親がそのマンションに住んでいることすら知らなかった。自慢じゃないが他人に興味がない性質なのだ。

たまたまその日俺は商店街の中の本屋を梯子していた。たまたまいつも通らない道をショートカットのために通った。たまたまマンションの前を通った。そこにたまたま彼女は落ちてきた。

俺はS席・VIP待遇で人の落下ショーを見てしまった。地面と彼女がぶつかる時、大した音がしなかったのが印象的だった。商店街全体に満ちている雑踏の方がよほど大きな音を出していた。

彼女が彼女だと——伊藤春だと分かったのは、長い黒髪と長い身長の子だった。その二つでもしかしてと思い、血に濡れた顔——半分だけアスファルトに密着し残り半分が見えた——を見てああこれは俺が人生で始めて告白された相手だと確信した。

彼女の周りには色々と散らばっていた。スカートかシャツのポケットにでも入れていたであろう彼女の物らしき携帯電話や学校では授業中だけかけていた眼鏡。それから勿論血液。それと更に、赤い風船のような物。

真っ赤な風船だった。それほど大きくは無く、片手に収まるくらいだ。どうも空気が詰まっているのではないらしく、それなりの重量でころころと転がっていた。

自殺現場で、その風船だけが何だか異質だった。その辺りまで見て取って、そこで悲鳴が上がった。俺のじゃない。通りがかりの誰かのだ。

あっという間に人の波が押し寄せ、俺を押しつけ死体に近づいていった。すぐに死体が人の背中で見えなくなり、結局現場が警察のシートで覆われてしまふまで色んな背中だけを見つめていた。ブルーシートが張られてからはつやつやしたその青色を見ていた。

やがて、俺は警察のおじさんに腕を掴まれて声をかけられ、放心したまま近くの大きな警察署にパトカーで移動した。

彼女は、自殺したということだった。

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎〃おれたちのどうでもいいこと

その二

商店街の中にはゲームセンターが二つある。大きなのと、小さなのだ。大きい方は景品ゲームが沢山、最新の体感ゲームが沢山、アーケード機種が沢山、プリクラっぽい機械が沢山。そんなところだ。小さい方は、店の入り口にだけ最新のゲームを置き、少し中に入ると、そこに並んでいるのはレトロなゲームばかりという怪しい店だった。有名なゲームの偽物の台まである。

そこは俺の行きつけだった。

俺はセーラー服のスカートを派手に翻しながら回し蹴りの連打を筋肉満点の道着姿の男に叩き込み、相手がよろけたところにすかさず多段ヒットの波動の拳をかました。かっこいいけど古臭いデザインの「KO」の表示が光って、俺はコンピューター相手に十二連勝した。

最新の3D映像を駆使した格闘ゲームやアクションゲームが世に溢れる中、俺が最も没頭できるのは何故か十数年前に大流行した2Dグラフィックの格闘ゲームだった。いつも座る台は決まっていて、店長とも顔見知り。この古臭いゲームだらけのゲーセンは俺のたまり場（どうせ一人だけどさ）だった。

と、画面の表示がいきなり切り替わった。乱入だった。向かいの台にいつの間にか誰か座っている。挑戦者登場というわけか。

対人戦は久しぶりだった。俺はそれまでと同じにセーラー服の少女を選び決定ボタンを押した。すぐに対戦が始まる相手はがりがりに痩せた肌の黒いヨガっぽい人を選んでいた。こちらのキャラとしては相性が良い。

だが動き始めると、とろくさくしか動けないはずの相手キャラは

俺を翻弄し続け、遠くから腕を伸ばしてぺちぺち叩いたかと思えばこちらの蹴りをひよいひよいかわしてカウンターで火を吐いた。

丸焦げにされてやられるという間抜けを二度繰り返し、0勝2敗・ストレート負けとなった。自慢じゃないが、ここの店のこのゲームにつき込んだコインは少ない。少なからず敗北にショックを受けつつ、俺は台の向こうの誰かを一目見てやろうと立ち上がりかけた。

が、相手のほうが早かった。俺が立つ前によきつと台の向こうから頭が生えて、こちらを見下ろした。

「強いじゃん」

少女だった。大きな目と桜色の唇が光り輝いている。肩に届かないくらいの髪は大人しさよりも快活さを感じさせる具合に整えられている。顔自体はまだそれほど成熟しておらず、年の頃はせいぜい俺と同じほどか——なんにしる古臭いゲーム機やそれを並べているこの店には似合いそうも無い女の子だ。

「や、そっち圧勝だったじゃん」

少女の口調につられてため口で返す。彼女は席を離れてこちら側に回りこんできた。

「でも強いよ。私とやると皆ほとんどまともなゲームにならないもん」

「それはどうも」

「ここはよく来るの？」

すとな、と俺の座る椅子の横にしゃがんで、挑むような目つきで彼女はこちらを見上げた。見下ろされても見上げられても、なんだかすばしっこい動物に睨まれているみたいに感じる。

「ああ、うん。時々ね」

「私は始めてきたんだけどさ、ここ、凄いな。ふつるいのが一杯。博物館みたい」

周りの年代物のゲーム筐体を指す。入り口近くのカウンターでは店員が苦笑していた。

「ね、またやろうよ」

こてんぱんにしてやるからさ、とでも付け加えそうな自信満々の顔。ただ、悪意はなさそうで、そのせいか悪く思いつらい相手だった。

「いいよ。多分勝てないけどさ」

「そんなことないって。今日は私も調子良すぎたもん。ところでさ」
「何？」

「君、伊藤って子の死ぬところ見たでしょ」

コップの水に墨でもたらしたみたいに、弛緩しきっていた気分が一気に緊張に上書きされた。

ざー、と自分の血が流れる音がテレビの砂嵐の音として多分幻だろうけど聞こえた。知らず椅子からは腰が浮いている。

致命的な一言をいきなり投げつけてきた相手はこちらのそんな反応を俺の表情と合わせて見て、にい、と笑った。「ビンゴ」とか「やっぱり」って表情だ。

伊藤春の死からは一週間半しか経っていない。目の前で死体が出て十日間。

勿論強烈な記憶が今も頭の中には納まっている。眠れなくなったとか物が食えないとかそういったことにはなっていないが、その代わりか、少し気を抜くとすぐに考えてしまう。

あの時俺がすぐにでも返事をすれば、彼女は今も生きていたろうか。「スキスキダイスキチヨ」愛してる」で彼女は今も生きていることになったろうか。

反射的に――俺は叫びそうになった。あるいは怒鳴りそうに、か。お前なんだよ、と目の前の勝気な顔した少女を突き飛ばしたかった。じつと座って一人でゲームしてれば、少なくともいつものようにだらだら生活してられる。だからわざわざここに来ているのに。何邪魔してるんだよ。

俺の中で何かが盛り上がって、だけどはじけたり沸騰したり自滅したりする前に、背中をぼん、と叩かれて、正気が戻ってくる。ふ

わふわした暖かさが近くに感じられて、軽く抱擁されたことに気がついた。

「や、ごめんよ」

距離をつめて、彼女は俺の背中に片手を回して宥めた。「悪かったよ」といいながらぽんぽんと背中にかかるいタッチが繰り返された。悔しいことに大いに効果があつて、俺は落ち着いてしまった。

彼女が離れると、俺は脱力してへなへなと椅子に座り込んだ。

「何で知ってんだよ」

ずっと少女の顔から朗らかさとも言うべき何かが少し引いて、その分だけ真剣さが満ちた。

「私は、彼女の事を調べてるの」

「……………」

「ちよつと気になることがあつてね」

「伊藤の——知り合いか何か？」

うつん、と首を振った。

「じゃあどうして」

問い詰めると、彼女はしばし顎に軽く指をかけて考えるポーズをとり、やがて「よし」と一人呟いて結論を出した。

「詳しく話すよ。どこか、落ち着けるとところに行こう」

「ここは？」

「あまり人に聞かれたくないの。あの店員とかにね。君だって、あの事件のことなんだから聞かれたくないでしょ？」

そついわれれば、反論すべきところは無かった。俺は胃の底が引き攣ったような感覚を憶えつつも、馴染みのゲームセンターを後にした。

この店を出たとき、俺は少女があこの自殺のことを「事件」と呼んだことにさほどの注意を払っていなかった。

*

「そ。私、宇宙人よ。良く分かったわね」

俺は馬鹿みたいに口をあけたまま動きを止めた。いや実際馬鹿だった。年端も行かない少女をしつこく問い詰めたりするからこんなことになる。宇宙人だって？

俺は商店街の北側、一番端っこの通り沿いにある喫茶店の椅子に座って硬直している。近くに小さな神社のあるこの店には、一度も来たことが無かった。相手の案内で入った店だが、雰囲気は良い。インテリアは上品さで溢れ、そのせいか少し高級な店にも思える。メニューが数百円の表示で埋まっていることを確認して安心してしまったくらいだ。

「宇宙人って、地球じゃない宇宙の宇宙人？ 火星とかの？」

「そんな近くじゃないけどさ。火星人て。そんなのいるの？ 木星の衛星とかの方がいそうじゃない？」

地球人に訊くなよ。月行くのがやつとの未開民族だぞ。

視界がぼやけた。自称宇宙人の、やや装飾の多いシャツの襟元、そこから伸びる白くて細い首がじんわりとバックの色と重なって滲む。

記憶のテープをもどそう。冷静になるべきだ。きゅるるる、がちや。

店で席に着くなり、彼女は机の上に新聞をいくつか乗せた。席は入り口から遠い奥のほうにあるテーブル席で、二人掛けの小さな物だ。向かい合って座ってみると、彼女は小柄に見えた。小さな体に何だか分からない気力がしっかり入っている——小型高性能、良質の家電製品みたいだ。

「まずお互い自己紹介からはじめよっか。私は矢場ハルカ。ハルカって呼んでくれて構わないから」

「白羽根敏樹。呼び方はご自由に」

「じゃあ春日野」

「さくらかよ」

そういう自由さじゃねえよ、と嘆いたが、彼女はすでに決めてしまったらしい。春日野ってのは、彼女——ハルカと出会った時にやっていた対戦格闘ゲームのキャラで、俺が使っていた奴だ。セーラ——服の格闘少女で、有名なキャラクターだった。

「それじゃあ春日野君」

ハルカは机上の新聞を整理して、俺に見やすいように並べ替えた。有名ないくつかの新聞と、聞いたことの無い名前の地方紙、ネットの掲示板をプリントした物と思しき紙まである。新聞記事は大きさがまちまちだが、どれも写真が大きく乗るほど大きく扱ってはいなかった。

「これ、あの自殺の？」

記事はどれも、今俺たちのいる商店街で白昼に起こった自殺について書かれたものだった。〇〇高校の女子生徒、自宅ベランダから落下。死亡。警察はこれを自殺としている。そんな内容が並んでいた。

「そ。あまり大きくは取り上げられてはいないけどね。どれも同じようなことしか書いてないし」

「この中に——俺のことが？」

俺は第一の目撃者で、ほとんど唯一伊藤が落下するその姿を見た人間だ。何秒もかからずに落ちる自殺者の落下中を目撃するなんて至難の技で、はつきり言って運が悪かったといえる。一応重要な目撃者として警察に連れて行かれたが、なにも有益な情報を話すことは出来なかった。

なにせ、俺は薄情な独り好きの人間で、彼女の現在をよく知る人間ではなかった（これから親しくなるかどうかというときに自殺されたのだ）し、自殺の現場にしても、落ちる様子なんて冷静にじっくり観察できたわけではない。

「うっん、そういうわけじゃないよ」

「なら何で——」

何で俺に。何で俺が現場を見たことを知ってる。言い切る前に彼

女は答えた。

「ずっと前から調べてたことがあるの」

オーダーを取りに店員がテーブルに近づいた。俺とハル力は適当に飲み物だけを注文した。

気を取り直して、話を再開する。

「調べてたって……伊藤のことを？」

「違うよ。たぶん春日野君も知ってると思うんだけどなあ」

「なんだよ」

ハル力は探るように俺の目を見て、やがてふう、と息を吐いた。ま、いいかと小さく呟いてようやく明かす。

「赤い風船。自殺があつた現場で、君、見てるでしょ」

「赤い——」

風船？ と疑問で返そうとして、すぐに思い当たる。赤い風船、赤い……。

「赤くて小さな風船。手の平に収まりそうな大きさで、中には何か液体状の物が詰まってる。それを、春日野君は死体と一緒に見たはずだよ」

血の気が引く音があるとしたら、今俺が聞いている音だ。小さな粒の砂が細く静かに流れていく音。

確かに俺は見た。死体のすぐ傍で、他の情景に似合わず可愛らしく転がっていた赤い風船。小さくて何かの詰まった風船。

「私はそれを調べてたの。ずっとね。そしたら今回の事件が起こって、その現場には君がいた」

でたために積み木を積むようにハル力が流してくる言葉に、どことなく淡白さを感じてしまい、俺は少しだけ苛ついた。

「何でそんな、風船なんか」

どこにでもあるだろそんなもん。赤い水風船なんて、駄菓子屋で一袋何十円かで売ってる。そんなもの、どうして。

「信じてもらえるかどうか分からないけどね。あれは単なる風船じゃないんだよ」

どこかの三流探偵のごとく、人差し指をぴつ、と立ててハルカが告げた。

「単なる、って……風船は風船だろ。中に金でも詰まっていたのかよ」「いいや。そんなものじゃない。仮に地球一つ分のダイヤモンドが圧縮されて収まっていたとしても、そんなものでは勝負にならないくらいに貴重で価値のあるものだ」

「ダイヤモンドって——風船が？」

「中身が、だよ。それにあれは正確には風船じゃない」

「風船じゃないって、あれはどう見ても」

赤い色外皮は、ゴムそのものに見えだし、地面を転がる際の様子も、柔らかな風船にしか見えなかった。

「中は空気だったかい？」

唐突に訊かれて俺は言葉に詰まった。中身？ ついさつきハルカ自身が液体の詰まった、と言った気がするが。

良くは憶えていないが——死体の傍でのあの風船の転がりかたは、なにか空気ではないものが詰まっている重量を感じさせた。それに空気入りの風船にしては大きさも小さすぎる気がする。そもそも死体と一緒に落ちてきたのが空気入りの風船なら、死体に比べて少しばかり遅く落ちてくるのではないだろうか。斜塔の実験を知らないわけではないが、地球上には空気抵抗がある。

あの時——そんなことは無かったように思う。死体が落ち、それきり頭上からは何も降っては来なかった。気がつくやうに死体の傍に風船があった。

あれは、どちらかと言えば、伊藤自身が持っていたか、ポケットにでも入れていたものではないだろうか。それが落ちた際の衝撃で転がり出た。そのほうがしっくり来る。あの時の光景を思い出してみるに、そういう感じだ。

「いや——多分水か何かが詰まっていたと思う」

返答を聞いて、彼女は冷笑を浮かべた。ゲームを終えた時のような明るい顔ではない。無慈悲なヤクザが債務者を追い詰める時の顔

だ。そんなもん見たこと無いけど、多分。

「仮に水の詰まった風船だとして。それが八階から落下して、無事に地面を転がってた？」

「――」

常識的に。水を詰めた風船を、八階の高さから落とすと、それは無残に弾けることになる。

「いや、でも、もしかしたらあれは伊藤の服が何かに収められていたのかも」

「ポケットが何かに？　それが地面に激突した際に上手く押しつぶされずに転がりてきた？　ありえるかもね。でも、ちょっと不自然じゃないかな。手の平大のサイズの、水入りの風船をポケットなんかに入れるかな。大きすぎるし、ふとした瞬間に割れちゃうかも」

「じゃあ、あの風船は……」

「だから、風船じゃないんだって。八階から落ちても割れない風船状物質。私はアレを――」

声を潜めて、しかししっかりと聞こえる声で、その名が発せられる。

「『赤い心臓』って呼んでる」

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎「おれたちのどうでもいいこと

その三

「これはほんとは最初に訊きたかったんだけどね」

顔の前で軽く指を組んでハルカは声のトーンを落としていた。

「自殺現場を、君は見た。一緒に赤い風船も」

何とか頷く。

「その後野次馬が君の前に群がって、君は自殺現場が見えなくなっ
た」

何でそんなに詳しいんだ。またも頷く。

「警察がシートで現場を覆って、野次馬がばらけて消える。君はそのシートの中を見た？」

「いや、見せてもらえるわけない」

「じゃあ、風船がどこにいったか知ってる？」

びしり、と亀裂の入る音がしたかもしれない。

シートに覆われた現場を俺は見せてもらえなかった。見ようとしなかった。だがその後警察署に連れて行かれ、色々と現場の状況を訊かれた俺は、細かく答えていった。

落ちる様子。

落ちた伊藤の近況。

落ちる前の現場の様子。

落ちた後の現場の様子――。

落ちた後。その現場の様子。何がそこにあったか。どのようにあったか。俺は細大漏らさず答えた。伊藤の体の向きや転がっていた携帯電話に眼鏡、そして、風船のことも。

「一部現場の状況についてかかれた記事やネットの書き込みもあるけどさ、どこにも無いんだよね、風船についての言及は」

ハルカの視線は俺と机上の新聞・ネット掲示板のプリントアウトに向けられていた。

風船の事を聞いた警察は、他の様々な聞き取り事項とは異なり、何度も俺に確認した。本当に風船があったのか、色はどうだったのか、見間違いではなかったのか。

そして最終的に俺は聞いてしまった。警官は喋るつもりではなかったのだろう。だが、聞き取りに使われていた雑然とした警察署の一室で、ずっと向かい合って話していた警官はぼそりと呟いた。

そんなもの、現場に無かったんだけだな。

「……知らない。警察も知らない。現場の遺留品は全部警察がさらったはずだった。けど、その中には風船は無かった——そういうことだと思う」

俺は記憶違いを疑われて、何度も風船のことを確認されたのだ。

それは逆にいえば、集めた現場のあれこれの中に風船が全く含まれていなかったことを示している。

俺がそのことを話すと、ハルカは期待通りという顔が半分、なんだ残念という顔が半分の奇妙な表情になった。

「私はね、あれをずっと探してるんだよ」

はあ、と溜息。

「警察も行方を知らないか。やっぱり、ね。あーあ、君が持ってたくれたら楽だったのになあ」

なんだかそれは、妙にしらけた台詞に聞こえた。

さて。

俺は——正直、そこまでの話を通じて、目の前の少女の気を疑ってしまっていた。

伊藤春が死んだ。その自殺事件を引き合いに出して、風船のことを調べている、だ。どうかしてる。割れない風船？ だからどうしたって？ 割れてしまった人の頭蓋よりも注目すべき物だろうか？ だが、そんなおかしさに反してハルカの目は真剣そのものだった

し、その真剣さは狂気やなにかの異常に基づく真剣さではないように思えた。

俺の訝る視線に気がついたのだろう。ハル力は溜息をついて、椅子の背にもたれた。

「まあ、いきなりだしね。しょうがない」

肩をすくめる。そのまま彼女は続けて、「だけどね」と次の言葉を発した。

「こんなことくらいで驚いていちゃいけないよ。今から話すことの大部分がおかしな話なんだから」

「これからって……」

「そもそも何で私が君を、君こそが最初の目撃者だって分かったか、だよ」

話が戻った。最初に俺が掲げた疑問だ。

「あの時同じ現場にいたとか？」

あるいは警察関係の人間に通じているとか。それ以外には……誰か適当な人間から聞いたのだろうか？　しかし誰に？　自殺自体は学校でも町でもある程度話題になっているが、その第一発見者であるところの人物がイコール俺だとはほとんどの人が知らない。警察は口が軽くない。

そういった可能性のことごとくを、ハル力は「違うよ」と切り捨てた。その上で。

「あのマンションさ、自殺のあったとこね。あそこ、表にも裏の方にもカメラがついてるのね」

いきなりマンションについて言及してきた。

「勿論それほどの数じゃないんだけど、共同玄関や建物の端っこんなかに、外向きのカメラがあるの」

彼女は胸元のポケットからペンを取り出すと、机の上の新聞から適当に余白の多い一枚を選んで、図を描いた。マンションを示す四角形が最初に描かれ、その四角形のいくつかの箇所に黒丸を記した。それがカメラの位置らしい。

続いてそのカメラの点から扇状に二本ずつ線を伸ばす。分かり易い、カメラの視野範囲だ。

「こうしてみると、マンション周りのほとんどの部分をカバーできてる。ほんとに高級マンションよね、これ。まそれはいいとして、分かるよね？」

とん、と彼女は指で図の一点を指し示した。そこは二台のカメラによって移されている場所だった。

「自殺現場、だ」

「ご名答」

ハルカはにつこりと微笑んだ。目元がいやに嬉しそうだった。

「で、そこからなんだけど。この二つのカメラは、伊藤春が落ちた場所も映してるし、更にもう少しマンションから離れた場所までをカバーしてる。具体的に言うと、マンション前の道の三分の一くらい」

そこまで言って「どう？」というような、問いかける視線を送られた。大いに戸惑いつつも――答え自体はすらりと出てきた。

「俺がいた場所」

落ちてくる伊藤に気がついて足を止めた場所。野次馬が俺を押しのけるまですっと佇んでいた場所。そこも、カメラには写っていた。俺はカメラにすっかり映っていた。俺が自殺を目撃したこと、死体を眺めていたこと、風船を目にしていたこと。その全てがカメラには記録されていた！

「……いや、だからなんだよ？」

カメラに映った。記録された。だが、それだけだ。

「ひよつとして、あのマンションのオーナーとか？」

それはねーよ、と思いつつも確認する。案の定目の前の少女は「そんなわけないじゃん」と軽く否定した。俺は少し考えて次の問い掛けをした。

「君は――ハルカは、俺が第一の目撃者だってことをカメラの情報から知った？」

「イエス」

こつくりと首肯してきた。可愛らしい動作だったが、それを気にかける余裕は無い。

「君はハッカー……いやクラッカーっていうのかな？　そういう人？」

「ノー。でも惜しいかも」

くすりと笑ってハルカはアイスティーに口をつけてから、グラスを新聞の上に置く。紙にグラスの汗が滴りしみこんでいく。

「そもそも、あそこのカメラの映像はさ、マンション内でチェックされてて、何かの回線を通じて外部に送られたりはしてないんだよ。あの建物の警備を引き受けてるのは大手の警備会社——散華警備つとこだけど、そこは映像を外に持ち出す際必ず最小限のコピーをとってDVDやなにかの物質として持ち歩くんだよ。だから、ネットから覗き見することは出来ない」

クラッカーとやらでも無理なわけ、と教えられる。

考えてみれば、そりやそうだってことかもしれない。部外秘の情報を、いくら安全な通信があるからってそうそうネット上で送信したりはしない（のかもしれない）。それに監視カメラの映像なんて、まず外部に持ち出さなきゃならない場面自体あまり無いものだろう。じゃあ、それを、その映像を外部の人間が見ようとしたら、どんな方法でそれが可能になるだろうか。

考えるより先に答えが提示された。

「じゃっじゃーん」

ハルカが、新聞などを取り出した鞆から、数枚のディスクを取り出して自慢げに俺に掲げて見せた。ディスクは見慣れた大きさのCDサイズで、表面にDVDと印刷されている。メーカーのロゴさえ入っていないところを見ると、十枚単位で捨て値で売られている海外製のものだろうか。

「お前、それ——！」

にやっと。ハルカの、もう何度目か分からない得意げな笑み。そ

のとーり！ と表情が全力で語っている。

特に鋭いわけでもない俺だが、何かいけないものを見てしまったという直感が強く背中を走った。

「ばつちり映ってたよ、春日野君。それに風船も。野次馬が群がった辺りからは両方見えなくなっちゃってるけど。人がばらけた後、春日野君が警察の人に連れられていったのも見た」

機嫌よさそうだな。まあ種明かしたのは誰であつても気持ちの良いう行為だよな。じゃなくて。

「これを見たことによつて私は君が第一目撃者だと分かったわけだ、春日野君」

探偵風にポーズまで決めて言う彼女に、俺は間をおかず突っ込んだ。

「なんでそんなもん持ってたんだよ！」

「コピーしてきたんだよ、当然」

「やっぱりマンションか警備の関係者？」

「ノー」

「じゃあ」

恐る恐る、なるべく穏やかに。

「泥棒？」

「大げさだよ。こそつと忍び込んで焼き増してきただけだって」

俺は頭を抱えそうになった。多分目の前の少女が変なのは気だけじゃない。色々大変な人間なのだ、こいつは！

「嘘だろ……」

半ば祈るような気持ちで、誰にと無く呻く。だがハル力はそれに不満げな顔で答えた。

「嘘じゃないって。ほら」

「うるせえ——」

泥棒ゲーマーめ、と言ってやろうとして、俺は目の前の席に目もやり凍りついた。

そこには誰もいなかったのだ。新聞とアイスティーのグラスがあ

るだけで、その主たる少女の姿が一瞬で消えていた。

「……………あ？」

間抜けに口をあけたまま、俺はとうとう自分がどうかしてしまっただのかと疑った。自殺の一件が思った以上に響いているのか。

と、いきなり耳元で囁かれた。

「こういうわけで、私は凄腕のぬすつともなれるのです」

「うおお！」

驚いて立ち上がりつつ振り替えると、ハルカの透き通るような瞳がそこにあつた。俺の背中すれすれの位置に立っている。

「いやなんだよ。なんだこれ？」

混乱する。何が起こったか、自殺を目撃した時以上にわからなかった。

鼻歌交じりに席に戻るハルカ。それを呆然と見つめ、ぐちゃぐちゃとカオス化していく脳内に疲れが混じってくる。

俺も席に着き直す。片肘についてその上に頭を乗せる。

「……………」

無茶苦茶だった。

いきなりゲーセンに乗り込み、俺に声をかけ、自殺について出し抜けに尋ねた。

しかも、目的は赤い風船で、その風船は風船ではなくダイヤ以上の価値ある風船的な何かだと説明する。

マンションのカメラが現場を映しているということ、その映像がマンション内で警備会社によって管理されていることを知っていた。恐らくその映像に風船が映っていることも。

だからそれを盗み出した。マンション内の管理側の区域のどこか、データがある場所に侵入してコピーをとった。

そこには案の定風船が映っており、さらに死体と共に風船を目撃していたであろう少年も写っていた。しかし風船は結果的には現場から消えてしまい見つかっていない。風船に関する情報も無い。

ということ、目撃者の少年に突撃インタビューレッツゴー！

……まとめれば、これが、ハルカの行動である。重ね重ね無茶苦茶だ。一時的に考えることを放棄して、俺は椅子の背にもたれかかってぼそりとこぼした。

「お前、一体なんなんだよ？」

「なんだと思う？」

いきなり消えたり現れたりするわけの分からない奴の正体なんて、推測も出来ない。何だか馬鹿馬鹿しくて、俺はつついそれを口にした。

「宇宙人とか？」

「そ。私、宇宙人よ。良く分かったわね」

今に至る。

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎「おれたちのどうでもいいこと

その四

地球と月の間は四十万キロメートル弱。光が秒速三十万キロくらいだから、片道一秒以上かかる。そこまで到達したのが人類のベスト・スコアで、いまだ人は火星にすら行っていない。

地球と火星の距離は数千万キロから遠い時で数億キロになる。目的地が木星であれば、距離は更にその何倍にもなる。宇宙は広い。太陽系ですら茫漠とした、想像を絶する広さがある。

一体ハル力は、どこから来た宇宙人だろうか。

「ね、春日野君。私達、二人でチームを組もう。タッグっていうのかな？ それともコンビ？ どっちでもいいけど」

俺の呆れや馬鹿馬鹿しさや面倒臭いという気持ちの入り混じったアンニュイさを無視してハル力はそう提案した。

「チームって、何のチーム？ UFO研究会？」

「違うよ。なんていうかな、あれだよ、相棒物の刑事ドラマ」

「いや全然わかんないけど」

「ようは私達二人でこの事件を調べようってこと」

あまりに瞳を輝かせて言うてくるので、その勢いに圧されて俺は少々仰け反った。

「調べるって言うても、そんなの警察の仕事だろ？」

「じゃあ本当に、春日野君は今回のことが『自殺』で済ませられて良いと思ってるの？」

警察がそう発表してるんだから、済ませるも何も自殺なんだろ——
|。

とは、言えなかった。

フラッシュバックするのは、傾いた茜色の光に照らされた伊藤の顔だ。戸惑いと緊張と——もしかしたら淡い希望を滲ませた表情。

慎重に言葉を紡ぐ唇の動き。

『付き合っでは、下さいませんか？』

あれは告白だった。間違いなく。伊藤も俺も同じ空気をあの時吸っていた。心が落ち着かず、喉の乾く空気を。

俺は、ひどく情けない顔をしたと思う。自殺とされていいのか、そうハルカに訊かれて、喉の奥が詰まってしまった。

ハルカは、いつの間にか表情を変え、真剣な顔つきになっていた。固まる俺を観察してから考えを伝えてくる。

「私は、伊藤春という人物を詳しくは知らない。だけど、今回の自殺はどうもおかしい気がする。現場から『風船』が消えていることだけじゃない。自殺以外の何かを疑う証拠が全くと言って良いほど警察によって見つけられていないにも関わらず、一方で自殺を匂わせるようなものもまた伊藤春の周囲からは発見されていないと言われている。どのニュース、噂であれね。君は何か思い当たるところはある？ 彼女が自殺するような理由」

「何も……無いよ」

「いじめとか、進路の悩みとか。様子が変わったり、意味深な言葉を吐いたり、過去に自殺未遂かそれに近い何かをしていたり」

思い当たるものは何一つとしてない。半年同じクラスの隣の席であつたというだけだが、それでも伊藤はごく一般的な、楽しく暮らす女子生徒に過ぎなかった。高校生なりの悩みと能天気さの両方を、他の多くの生徒と同じく持っていた。

彼女が自殺する理由。じさつするりゆう。

「伊藤は……」

感情に任せて何かを大声で言いそうになり、しかし俺は自分でも何を言おうとしたのか全く分からず声をしばませた。代わりに、意志とは関係なく勝手に口から小さな声が零れた。

「あいつ、俺に告白したんだ。死ぬ三日前に」

俺はどうにかなっていた。多分、色々頭が故障していた。伊藤の死体と、宇宙人少女の立て続けの出現によって。だからこそ、誰に

も話さないはずのそれを話していた。警察にすら言っていない秘密。
「俺は、告白されて、その場で答えを返せなかった。初めてストリートに好意を伝えられて、驚いて、先延ばしにしたんだ、回答を」
さらさらと揺れる髪。姿勢の良さ。亡くなって後、伊藤の記憶は
どんどん強く意識の底に刻まれていつているような気がする。

「だけど、断ることなんて考えていなかった。俺は彼女に答えるはずだった。付き合って、上手くいくかどうかなんて知らないが、何かどうにかなるはずだったんだ」

ハル力は無言だった。俺の言葉を無表情に聞いている。

「あいつは俺に付き合おうって言ったんだ。自殺なんかするかよ」
力を込めた。何の確証も無かったが、俺はそう言い切った。

腹が立っていたのだ。

いきなり告白してきて、いきなりいなくなってしまったことに対して。

皆がそれを自殺と片付けたことに対して。

そして何より、本当に伊藤春が自分を好きだったのか、その確証が持てないことに対して。

もし好きなら、なんで自殺した？

謎がある。あれは本当に自殺だったのか。風船はどこに消えたのか。あの現場で何が起こっていたのか。

「春日野君」

ハル力が、机の上の俺の拳に自分の手の平を重ねた。宇宙人の手は冷たかったが、人肌が持つだけの熱はちゃんと持っていた。

「私は、宇宙人だよ」

その声には、何か重いものがしみこんでいた。

「警備会社から何かを盗み取るなんて朝飯前だし、姿を消したり、君は信じられないかもしれないけど——ほとんど人間からすれば超能力じみたことだって出来る。なにせ宇宙人だからね」

あるはず無い。ただの少女が、宇宙人などと、法螺話も良いところだ。だがハル力の発する雰囲気、視線や息遣いや声色が、その有

り得なさを感じる俺の心を無理矢理捻じ曲げていく。

「警察に不可能であつてもそんなのは関係ない。地球上の誰に不可能だろうと、私がいれば話は変わってくるよ」

だからね？ 瞬きを一つして、それからハル力は見たことも無い綺麗なウイंकをして見せた。

「二人で一緒に、真相を暴こう」

*

だらしない高校生の少年と、同じ位の歳に見える宇宙人少女による探偵チームが結成された翌朝。

頭痛で俺は目を覚ました。馬鹿みたいに頭が重かった。あの告白以降、理解できないことしか起こっていない気がする。知らないうちに地球は狂つてしまったのかもしれない。

俺は普段より二時間早く家を出て学校へと向かった。誰もいない学校に入り、自分のクラスのものではない教室へ向かった。

伊藤春の机はまだ置いてあつた。俺と別々のクラスになってから、彼女が過ごしていた教室と机。ドラマの中みたいに花が飾られていたりはしなかった。

俺はそこに座り込んだ。

（きつと、俺はおかしくなってる）

昔から、独りというのが怖くなかった。誰かと遊ぶのも、ただ独りで過ごすのも、どちらも苦ではなかった。だから、他の多くの人々のように、積極的に人の輪に入る必要もなかった。他人が嫌いなわけではない。ただ、必要性が無かったただけだ。

伊藤は自分を好きだといった。彼女は、一体何が良いと思つたのだろうか。おれの、なにが。

それ以前に、彼女は本当に俺のことが好きだったんだろうか。好きなら何故自殺したんだろうか。本当は好きでもなんでもなくて、今回の事件は本当に自殺であり、あの告白は虐めか何かのバツゲー

ムだったんだろうか。

多くの謎があるが、俺にとって大切な謎は、たった一つだ。それに気がついた。

伊藤春が、本当に俺と付き合いたかったかどうか。

俺は、それを知りたい。例えば彼女が死んでしまった後であっても。

その日学校で二つの事件が起こった。一つは伊藤のいたクラスの男子が一名、行方不明になったこと。もう一つは、帰り際玄関に制服姿の宇宙人が立っていて、俺に声をかけたこと。

「や。昨日ぶり」

啞然として俺はそいつ——ハル力を眺めた。どこからどう見ても完璧な、制服姿。いや、完璧と言っても可愛さという意味ではなく（それもないことはないが）、その制服のデザインが完全にうちの高校のものであることと、その着こなしがこれまたうちの高校の女子生徒そのものであるということである。

「……いつから転校したんだ？」

「どうかな、似合うかな。ほら、捜査の基本は足で、足で何するかって言ったら歩き回って聞き込みするか蹴り飛ばすかどっちかじゃん」

完全に無視された。スカートの端っこをいじくったり、その場で回ってみたりしている。

「だからどーした。何で制服なんか着てるって言うてるんだよ」

「学校で色々訊くためだよ。伊藤春はこの生徒だったんでしょ？ 昨日ああ言った手前、君だけに捜査を任せるわけには行かないからね」

結局制服であることに對する納得のいく説明は無かったが、もういい、諦めた。

「まあ、いいか」

よほど熱心に生徒の顔を覚えている教師がいなければ大丈夫だろう。無理矢理これは必要なことだと自分に言い聞かせる。

大事なのは、ハルカの言う「捜査」とやらのことだ。

俺は今日のもう一つの事件——男子生徒の消失について話した。

「名前は、石山秀行。伊藤と同じクラスの男子で、何日か前から休んでたらしい。ただ担任の連絡が本人・保護者共に全くつかなくて、今日までさんざん迷った拳句教師連中がようやく警察に届け出たらしい」

「ふうん。なんで今日まで知らなかったの？」

「それほど話題になってなかったから。伊藤が死んで、そのショックで休む生徒だって何人かいたから、たぶん皆気にしてなかったんだと思う」

「君はその石山君とやらのことは？」

「知らない。前に同じクラスになったことも無い」

「そっか……」

思慮深げな顔になって、ハルカは少しばかり俯いた。この少女は表情の変化が激しい。考え込む姿を見るに、どうやらこの石山失踪の件は彼女も知らなかったらしい。だとすれば、まだニュースにはなっていないということか——当たり前だ。今日事件化したばかりなのだから。

「訊き込むことが増えたね」

言うが早いか、彼女は俺の腕を掴んで歩き出した。

「行くよ、まずは伊藤春のクラスだ。まだ生徒が残っているだろう。案内したまえ、ワトスン君」

「宇宙人が、ワトスンって誰だか知ってるのかよ」

「知っているよ！ コナンの相棒だよね！」

「ホームズはどこいったんだよ！」

真剣なのかただ目一杯状況を楽しんでいるだけなのか。コロコロと雰囲気の変わる、謎宇宙人人間ハルカに引っ張られて、俺は廊下を教室へ向かって進んでいった。

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎「おれたちのどうでもいいこと

その五

十日以上も前に死んだ女子生徒、それも自殺と世間が処理してしまったことについて、いまさら同級生に何かを聞くというのはとてもなく難しいことだと言って間違いないだろう。

だがハルカはそれをやってのける。知らない教室、どころか知らない学校だろうに、彼女は俺を連れて伊藤のいた教室へとずかずか乗り込むと、まだ机に残っておしゃべりを続ける女子生徒や部活前の男子生徒に話を聞いて回った。

ここ数週間家庭の事情で学校に来ていなかったとハルカは嘯いて、伊藤の自殺に関して知りたいと迫る。はつきりと言葉にはしないが、さも生前の彼女と友人であつたかのような口ぶりで同情や哀れみを誘い出して効率的に情報を集めるその様は、憎らしいとか不気味だとか言うよりも単純に手段を選ばない目的への強い意志が感じられた。

「絶対！ 絶対に間違いだよ！」

今もすっかりハルカを信用した、伊藤とここ何ヶ月か仲良くしていたという女子が強い口調で話している。

「春、そんなことする子じゃないもん。特に何もへんなどこなかつたしさ、何かあれば割とすぐ人に相談するタイプだったし。自殺とか、全然信じらんないよ」

ふうん、とハルカが頷く。

彼女が自殺するだなんて考えられない。その種の証言は、教室のあちこちで訊くことが出来た。誰もが口をそろえてそう言う。伊藤本人の性格的にも、また彼女の最近の様子や状況からも自殺するとは考えがたい、と。

「そつか。ごめんね、ありがと」

「ううん、いいよ。ハルカさん、だったっけ？ 春のこと、また何か聞きたかったら聞きにきてね」

「そうする。あ、あとさ、石山君だったっけ？ なんかいなくなっただった？」

湿っぽい話を切り上げ、話題の行方不明事件を取り上げる——という流れで、二つ目の石山関連の情報も聞き出す。俺はほとんどハルカの後ろで突っ立っているだけで、彼女の社交性というか、図太さというか——そういったものに舌を巻いていた。

「ああ、うん、結構前からいなかったなあ、あの人」

「どういう人だったの、それ？」

しばし開いては考え込み、上手い言葉が見つからないと分かる表情を浮かべて見せた。

「なんていうか……変な人だったよ」

「変な人？」

「うん、あんまり良い言い方じゃないけどさ。いつもちょっと暗くて、人付き合いの悪い感じ。部活もしてなかったみたいだし、皆親しくないんじゃないかな？ だからいなくなっても今日までそれほど騒ぎにならなかったんだけど」

興味自体が薄い。そういう様子で彼女は石山なる人物について語っていた。彼はクラスの内外を問わずあまり人と関わらず、故に誰も彼を深くは知らない。成績はトップクラスで、委員の仕事などはきっちりやる為、仲の良い人物もいないが反対に誰かに嫌われるということもなかったようだ。

「空気みたいな人。独特だけど、誰もどうでも良いって感じ」

そうまとめた。その説明は、他の生徒から聞いた話と大差なかった。俺は石山という生徒がどんな人物かを想像しようとしたが、上手いかなかった。

ハルカが適当に相槌を打って、それから話を切り上げようとすると、「あ、でも」とその女子は思いついたように口にした。

「春と彼、仲が良かったみたい」

「二人が？」

思わず疑問を声に出してしまった。今まで俺の方には全く注意を向けていなかったのだろう、誰よあんた、といった視線をハルカ越しに向けてくる。

「どうして？」

ハルカが促す。

「時々、二人で話してるの、見たことあるから。何人かで集まる時にはないんだけど、二人だけで話してたりしてたっぽい。石山君、普段は必要な時以外喋りもしないからさ、はじめて見た時は吃驚したよ」

「へえ……」

ずっとハルカの目が細められた。

「ありがとう。じゃあ、またね」

「あ、うん。じゃあ」

教室から出て行くのを見送ってから、俺とハルカも外へと出る。

「もうここはいいかな」

そのハルカの言葉に、俺も無言で同意した。教室には既にまばらな人影しか残っていない。授業終了後のこの短い時間で、既にハルカは十名近くから聞き取りを行っていた。

廊下を歩き出し、俺が生徒用玄関へ向かおうとすると、いきなりハルカが肩を掴んでくる。

「職員室は？」

「職員室？」

「そ。どっち？」

嘆息して、素直に案内する。行動力のある宇宙人には、人間は敵わないらしい。

宇宙人というものがいるとして、それがどんな存在か、どこまで俺たち人類は言及することが出来るだろうか。

宇宙というのは広い、まだまだ未知の部分があるという。未知というのは少しも既知でないからして、つまりなんだって有りの世界なわけだ。人類以外の知的生命が宇宙に他にもいるとして、そういった生命体がそうそう人類にとってわかりやすい存在であるとは限らない、と勝手ながら俺は思っていたりする。確かに現代科学が明らかにしつつある宇宙の成り立ちは、素人には想像できないほどに宇宙の根源に迫り世界に神秘を解体しつつあるのだらう。だからそのような人類科学の予測に基づくような分かり易い生き物が宇宙人として存在することは充分考えられる。

それでもそういつた考えは同時に未だ科学にとって未知の部分に基づく知的生命の存在をも肯定することになる。

もしかしたら本物の宇宙人は、人間ではそれが生き物だと分からないような、根本的に人類とかけ離れた物であるのかもしれない。

そんなことを考えつつ待っていると、ハル力が職員室から出てきた。明るい声で「失礼しゃーしたー」とか言いつつ扉を閉め、こちらを向いて収穫ありと笑みを浮かべる。

「問題の石山氏の住所が手に入ったよ」

胸元からメモを取り出し、暗記していたのだらう、すらすらと市町・番地を書き出していく。

「どうやった？」

いまさらこの問いも無意味かもしれない。投げやりに訊くと、ハル力は予想通りの答えを返してきた。

「宇宙人パワーで盗み見たのさ」

生徒の詳細な個人情報が入った名簿。それが職員室にあることは誰もが知っている。が、個人情報保護に過剰反応するこのご時勢に、よく盗み見るなんてことが出来た物だ。

「今から行ってみよう。一緒に来るよね？」

本当にこのハル力は宇宙人なのか。

その可能性は充分に示されている。彼女は音もなく一瞬で俺の背後に移動した。カメラ映像や生徒の住所をいとも簡単に盗み出した。

可能性——だが決定的な証拠でもない。ひどくもやもやとする。
と共に、俺はひよっとしたら、という思いを持ち始めていることを
自覚した。

「ああ。行くよ」

ひよっとしたら。警察がつかめなかった真相という奴を、本当に
この宇宙人が明らかにしてくれるかもしれない。

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎「おれたちのどうでもいいこと

その六

盗み出した住所の場所には大きくも小さくもない一軒家が存在していた。住宅街の隅にひっそりと佇んでいる。

到着して早々、ハル力は家の裏手に回ると、車庫になっていると思しき場所のシャッターを片手で無理矢理持ち上げた。何か制止したりする余裕も無い、問答無用だった。

車庫だろうとなんだだろうと当然鍵はかかっていたはずだが、ひどく嫌な音を一瞬だけ立てた後シャッターは勢い良く開いた。

「ほら、入って」

顔を青くする俺に彼女はそう言っただけのける。通行人にでも見咎められた場合、人類初の宇宙人との共犯ということになるのか。危機感に後押しされ、俺はシャッターの向こうへと足を踏み入れてしまった。

どこにでもありそうな乗用車が一台置かれているだけの殺風景な倉庫。壁に小さなドアがついている。車のボンネットには薄らと埃が積もっていた。

「そこから家の中に入れると思うんだけど」

「なんで玄関から行かなかった？」

ハル力は首を傾げて、不思議そうな顔をした。

「なんでって……玄関ぶち破って欲しかったの？ シャッターの方がばれないでしょ」

この時点で、俺は諦めた。もうなんか、色々。自殺事件から先色々とあって俺自身も平静を大きく欠いている。仕方ない。

室内に変わったところはなかった。一般的な三、四人家族が暮らす家といった風で、落ち着いた調度のリビングや和室、子供部屋が

あるだけである。誰かと出くわさないかとびくびくしていたが、だれも室内にはいなかった。俺は人様の家に勝手に上がりこむという稀有な体験をしている事実を熱に浮かされたように頭の中で認めながらぼうつとしていた。その間にもハル力はあちこち家の中を詳しく調べている。冷蔵庫を開き、キッチンに入り、家中の収納を調べて回る。

すべての部屋を一通り回ってみて、俺はただハル力の後について回るだけだったが、彼女は家を調べている間もずっと考え込んでいる様子だった。リビングに戻ってみて一息つくくと、彼女はその思考内容を吐き出して俺に告げた。

「おかしいね」

「なにが？」

「石山君とやらはあの高校の生徒でしょ？ 両親と共にこの家に暮らす」

「名簿上はそうだったんだろ？」

「うん。でもこの家はおかしい」

「だからなにが」

なんとなく分かってきたが、それでも一応。ハル力は小さく息を吐いた。

「この家、全然人が使ってないね」

首を振って部屋をぐるりと見渡す。綺麗に片付けのなされた一般的な住宅の内部がひっそりと佇んでいる。それだけだ。

「そんなの、分かるのかよ？」

家具や家電製品の使用状態が何かでも確かめたのだろうか、と俺は思ったのだが、彼女はそれ以上に決定的な証拠がある、といって人差し指を立てて見せた。

「壁や床、テーブルや手すり、家中見てみたけど、全く日常的に使っているとは思えないほどに損耗が少ない。その上、皮脂を始めとした人体の分泌物も髪の毛や皮膚の小片なんかの老廃物も極端に少ない」

なんだって？ 説明の後半部分、すらすらとハル力が述べたことに大いに戸惑う。口をあけて惑う俺を見て、ハル力はふっと静かな笑顔を作った。

「私は宇宙人だって、何回言ったら分かるかな」

「いや、んなこと言われてもな……」

そもそも宇宙人と一口に言ったって、地球人はまだ正式に出会ったことがないのだから、それがどんなものか分からないだろう。

「案外一杯いるけどね。ただ、私もそうだけど、みんな地球人よりは高性能なことが多いよ」

さきほど得意げに立てた指を顔に当てて、彼女は自分の瞳を指し示した。

「やろうと思えば、十キロ先で時速二百キロで走る新幹線の乗客が読む新聞の見出しだって見える」

絶句する俺を置いて、尚も彼女は家の中をしばらく調べた。不法侵入を果たしてから三十分ほど、俺たちは結局家主の誰にも出くわすことなく家からの脱出に成功した。

曇り空が広がる薄暗い中を、適当な方向に向かって歩き出す。住宅街の中、犯行現場（？）から遠ざかりつつあることに安堵を憶えた後、俺は質問する。

「で？ 次はどうする？」

探偵役は完全にハル力の物だ。

今となつては唯の少女という存在からそれこそ地球と火星の間の距離ほどもかけ離れ、正体不明の宇宙人にしか見えなくなったハル力は、自称・超高性能な瞳・をずっと細めた。

「色々と行くところがあるよ。一緒に回ろう」
妙に魅力のある声で提案してきた。

*

色々、と彼女は言った。色々。それに対して俺は反対しなかつ

た。

正体はともかくとして、ハル力は少なくとも賢しらで、超行動派で、俺は従者のように付き従うしかなかった。伊藤春の自殺に関しては、俺に味方はいないのだ——警察の発表すら疑って、その上真実を明らかにしようというような味方は。

単なる一学生に過ぎない俺にとつて、ハル力の思考力や行動力、それに本当かどうか分からない超能力めいた宇宙人パワーは、どれほど胡散臭くとも何より得がたい武器だった。

そういうことで俺は一切反対せずに、頼まれるままにハル力を案内した。

現場となった商店街の中。

伊藤と特に交友のあった友人達の元。
事件を担当する警察。

それらの場所で得られた情報は、俺に分かる範囲ではこうだ。

- ・自殺直前、伊藤春は一人でマンションの自室にいたとされる。
- ・伊藤春は、周囲の人間の評価においてはまず自殺するとは考えられない人物であった。
- ・自殺現場となったマンション内部、また路面などの場所で、自殺以外の何かを疑う証拠や証言は一切存在しない。
- ・自殺前後、マンションに出入りする不審な人物などは監視カメラ映像には映っていないかった。
- ・石山なる男の行方は全く知れないままである。手掛かりすらない。完全に失踪している。警察も何一つ掴んでいない。

よくこれだけの情報を集めたと思う。ちなみに警察の内部情報やカメラ映像などは全てハル力が盗み出したものだ。一連の探偵ごっこでハル力は（俺も共犯になるのかもしれないが）少なくとも十数件の犯罪行為に手を染めていると思われる。警察の情報などは、一人で署内に入ったと思ったらたった十数分で伊藤の自殺・石山失踪

の両事件についての捜査情報を盗み見てきたのだ。宇宙人説が現実味を帯びるほどに、そういったところはとんでもなく高性能な少女である。ハル力は。

しかし、それら情報が集まったものの、というか集まったからこそ、捜査は暗礁に乗り上げたかもしれない。

俺は最初にハル力と出会ったときに話をした喫茶店で、首を傾けて溜息をついた。

「憂鬱そうにしちゃって」

意地悪な笑みを浮かべて向かいに座ったハル力が言う。

「……これさ、手詰まりなんじゃないの？」

俺は重い吐息と共に言葉を吐き出した。

「警察もその他も、誰も自殺以外を示す物を見つけてないし、色んな場所を実際歩き回ってハル力だって不審な物証だとかを見つけることは出来なかっただろ？　つまりさ、今のところ自殺でしかないって結論になる」

「伊藤春の周囲の人の話だと、彼女が自殺することは考えがたいという話だったと思うけど？」

「それはそうだけど」

俺だってそう思う——いや、思いたいのだが。

「けどこういう自殺とかって、大抵周りの人は信じられないそんなこと、って証言することが多いだろ？　テレビとかでも、あの人がそんな、ってやつ。だからいまいちそれだけじゃ自殺を揺らがすには不十分だと思うんだよな」

項垂れてしまう。テーブルに寄りかかって、深く息を吐く。

そのまま、何も言葉を発さずにいくらかの時間が流れた。戸外を行きかう人の流れが雑多な音を作り出して次々に運んでくる。足音、話し声、息遣い、衣擦れ。

「……ハル力は、本当に伊藤が自殺していないと思ってるのか？」
鬱屈した気分に後押しされて、その問い掛けが自分の口から飛び出す。自殺以外を疑うにたる証拠がほとんどないことが分かってき

た現状、ハルカはどう思っているのだろう。

一番怪しいのは、石山という生徒。伊藤が死んだのと時期を同じくして失踪した。だが彼の行方は全く分かっていないし、彼が伊藤をどうにかしたのなら、それなりの物証が残っても良いはずだ。

分らない。なにがどうなっているのか、自殺だったのか事件だったのか。

「最初会った時にも言ったはずだよ」

言われて、顔を上げる。

「今回のことは、おかしい。自殺以外を疑う何かが『不自然なほどに』存在しない。一方で、伊藤春が自殺すべき要因もまた不自然なほどに見つからない」

自殺以外を疑いがたい半面で、自殺を疑うこともまた難しい。だが、事実として伊藤はマンションから落ちた。

「それじゃあ、自殺でも自殺以外でもないってことにならないか？」

「ならないよ。『疑いがたい』という点が解消されれば良い——つまり、自殺を疑えるものか、もしくは自殺以外の何かが起こったことを疑える何かが見つけれれば、自殺か自殺以外かがはっきりする。そのどちらかでかたがつく」

つまり。

現状、伊藤に何があったかを知る材料が何もないのだ。その上で伊藤が自殺したということに社会的には決定されているのだが、これは「マンションから落下する」という点のみにおいて「自殺らしい」ということが薄らと疑えるからだ。

確かに人がわざわざマンションのベランダを越えて落下するという出来事は、自殺を疑うにたる事態だろう。だが俺はそれを打ち消すだけの、「自殺を疑えなくする要素」も持っているのだ。

それは、彼女が俺に告白したということ。

「どっちなんだ」

呻く。もううんざりだった。死んだ伊藤が真実どういった状態であつたのか——自殺する動機があつたのか、俺からの、告白の返事

は必要なかったのか。死者の思いを材料が足りない状態で推測し続けることにおれは疲れきっていた。

と。肩にハルカの手が触れた。

「まだ確定できるわけではないけれど――」

目の前の探偵が、宇宙人が、俺に救いの言葉を述べる。

「謎は全て解けたかもしれない」

宇宙人的ないんちき満載でね、と付け加えて締めくくった。

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎Ⅱおれたちのどうでもいいこと

その七

天の川銀河は、それはもう広大な世界である。最初にハル力はそのスケールを俺に語って聞かせた。地球と太陽の距離。太陽系の広さ。何年か前に打ち上げられた外宇宙探査用の小型機が、とんでもないスピードで宇宙を駆けつつも、あと何年もしなければ土星にすらたどり着けないということ。そしてそういった距離感が、ほとんど役に立たなくなるほどの広さが、銀河であると。

そこはとてつもなく広い場所で、気の遠くなるほどの星が点在する。人間のような知的生命の誕生は確かに奇跡的だといえるものの、何せ広い銀河である。そういった奇跡は、そこかしこで起こってしまうのだ。

「だから、今も昔も宇宙人——知的生命なんてのは、人間レベルからそれ以上のものまで何種類も確認されているの」

宇宙人——とりあえずここでは便宜的に呼んでおく——は、積極的に交流することもあれば、互いに言葉一つかけないこともある。各種族ごとに事情は複雑であり、また生態も多様であるからだ。

それでも、自分達以外の知的生命とコンタクトを取ることができる種族は、大抵ある一定以上の水準の文明を有していることが多い。星の中で有機的あるいは無機的に生まれた生命は、その生存において、誕生初期の状態では当然ながら生まれた星の環境に適應することのみが求められており、外宇宙への進出には多くの時間や変化が必要であることが多い。

宇宙に船出を果たし、恒星間のとてつもない距離を移動し、また別の恒星へと飛び立つ。そういった離れ業が出来る種族でなければ、他の知的生命とのコンタクトは難しい。広い宇宙で、偶然自分達の

下に多種族が宇宙からやってきてくれることは稀だからだ。

恒星間を何とか渡ることの出来る種族。楽に渡ることの出来る種族。楽に、そして素早く移動できる種族。宇宙に適応した種族。意識を分散させて同時にいくつもの旅を進行させる種族。文明レベルによって宇宙人は整理され、いくつものランクがそこには存在することになった。

そしてその頂点に近い部分——恒星間どころか、銀河の中心部から端までを瞬く間に移動できるような、それこそ銀河スケールでも類を見ない「奇跡的」存在の種族がいる。何千何万年もの時間をコードスリープや有機的身体の無機化——機械化——によって耐える種族を尻目に光速に縛られずにワープし、空間や時間そのものの構造に自身の意識を保存できる種族。

それを他の種族は、『監視者』と呼ぶようになった。

名前の由来となったのは、その超常的（頂上の）種族が、ある小さな惑星を監視するような動きを見せ続けていたからだ。

丸くて青い、自身の大きさに比べてとても大きな衛星を連れた惑星、地球を監視しているようだ、多くの種族が囁きあった。

実際そいつは監視かそれに近い何かを行っていた。地球の知的生命種族——人類を見守り、その文明や知性に大きな影響を与えようとする外宇宙からの訪問者を時に別の銀河へと追放し、時に原始すら残さないレベルで分解してしまった。

監視者は自然な状態での人類を観察したがっているようだった。それを阻害する物——人類文明を超えた文明の地球への混入に注意を払っていた。

だから、多くの知的種族たちは、地球に潜入する場合、自身の存在を、力を、文明を、必死に隠さねばならなかった。優れた監視者を怖れ、隠れ潜むことが必要だったのだ。

「どうして宇宙人たちは地球に潜入なんてするんだ？ そんな厄介な星に」

「赤い心臓、よ」

数多くの知的生命が、監視者の桁外れの力を——知的生命としての高いランクを、得たがっていた。何十万年も何千万年もかけていくつもの種族と交流を重ねいくつもの種族を支配し飲み込み文明を発展させた種族たちであつても、その中に光速を越えてワープする種族は存在しなかったし、生命体としての形態進化にしても、超高度な小型機械の身体を手に入れたり、恒星レベルのコンピューターの中の電子生命となつたりするのがせいぜいだった。物理非物理のくびきからのもつとも自由になつていたのはやはり監視者たちだったのだ。

監視者達の行為の意味もなにもかもが、謎だった。ただある事實は、彼らがとてつもない力を持つということだけ。

そついつた状況の中、ある一つの噂——情報が、宇宙人たちの間に流れた。監視者の大いな知恵が詰まつた『心臓』が、彼らの監視する惑星の中に転がっているという——。

それは一説には、監視者の過去から未来のすべての記録と記憶であり、また一説には監視者の住む別宇宙が詰まつている入れ物と言われ、またまた別の種族は、それが超光速での空間移動の秘密の詰まつたツールだと噂した。

進化に行き詰つていたり、自らのありように限界を感じていたりした多くの種族が、この心臓と呼ばれる何かに大いに注目した。

監視者の目がある中で、地球を搜索することは並大抵のことではない。普段なら地球程度の大きさの星など数千万の搜索機械をたつた数時間で走らせスキャンしてしまつたりできる宇宙人達も、「地球人がもつ以上の文明を使えば監視者に知られる」という制約の中では、己の力を発揮できなかった。

多くの種族がその搜索に挑み、同じ数の種族が失敗した。それでも挑戦者は後を絶たなかった。

いつしか彼らの探し物は、『赤い心臓』と呼ばれるようになって

いた。

「犯人は、だから恐らく、人間じゃない」

宇宙人。赤い心臓を狙って、監視者の目をくぐりぬけ地球に潜伏する生き物達。

「ハルカ、みたいなの？」

俺は半笑いで、ひくつきかける頬を押さえつつ、そう訊いた。良し加減に馬鹿馬鹿しくなっていた。ハルカの存在だけでも充分以上に馬鹿げているのだ。

大きな大きなスケールの宇宙と、その宇宙を駆ける多くの知的生命。そんな、ほとんど小説家漫画の中のような空想的で誇大妄想的な話が、自分に、自分の住むこの小さな町に、そしてあっけなく死んでしまったたった一人の少女に関係してくるということが、まったくもって想像できなかった。

ずっと浸かっていた心地よくもない現実という空気がすっかり別の、ねっとりとした不愉快な物に置き換わって支配されていくようだった。

ハルカは何も、言葉に詰まることもなく、頷いた。

「そう。私みたいで、あるいは君のようで、まとめて言えば人間みたいな」

いうまでもなく、宇宙人の姿形や、精神構造は人間の想像力を超えて多種多様であり、人間に近い存在の方が少ないくらいだ、と付け加えてくる。

「だけど、監視者が目を光らせている地球でなるべく完璧に隠れて行動するなら、絶対に目立つてはいけない。

地球にはない何かを警戒する監視者にスルーしてもらう為に、一番有効な方法は何か。分かるかな？」

「いいや——」

分からない、と言おうとしたが、途中で舌が止まった。ハルカみたいに。俺みたいに。先ほどの言葉で、既に答えは示されていた。

「地球の生き物に、なりきること……」

低い声音でそう答えると、ハル力はこくりと頷いた。

なるべく地球の生物に、人間に、近い存在になること。意識までもスキャンしてしまう監視者から逃れるために、最低限の自己意識や目的意識や記憶を残して、精神的にも肉体的にも地球人に擬態すること。

それが、多くの賢しらかな宇宙人の取った行動だった。

ああ、それだったら、わかる。俺にだってわかる。

なんで彼女が死んだのか、もしあの自殺が自殺でなく殺人だったなら。

その犯人は、出来損ないの人間モドキだ。

*

その日、俺とハル力は罌を仕掛けた。とても単純な罌。

ハル力は商店街の中のいくつかの場所で、これ見よがしに小さな赤い風船を見せ付けて、俺と適当な話をした。勿論その風船はただの水風船だったが、ハル力はそれを大事そうにスカートのポケットにしまいこみ、俺とアーケードの下を歩き回った。

俺は、ほとんど夢を見ているような気分だった。ときどき、ハル力の背中が伊藤の背中にダブって見えた。宇宙人なんてやつぱり現実にはいなくて、俺はただ死んだはずの伊藤の後につき従って歩いているだけじゃないのか。それだったらどんなに自然だろう。

自然な現実——そう、おれにとつての現実、伊藤が死んだり宇宙人が出てきたりするような酷いものではないはずだった。約束された一週間後は、俺も伊藤春も大いに照れながら過ごすはずだったのだ。

俺から借りた真新しい消しゴムを急いでノートに押し付けていた隣の女子生徒の動きが唐突に固まった。見る見るうちに顔を青くし、

長い背丈をまるめて消しゴムを凝視している。

授業をほとんど聞き流しながら俺はその様子を眺めていた。どうしたんだろう、上手く消えなかったかな、何て考えもしたが、その隣の彼女はどうにもそんな様子ではなかった。

やがて、たつぷり十数秒もした後、恐る恐る彼女はこちらに顔を向けた。申し訳なさが顔一杯に張り付いていて、なんだか犬を怖がっている小さな子供のような顔だった。それが面白くて、俺は少しだけ笑いそうになりながらも訊いた。

「どうしたの？」

「あの、これ……」

おずおずと、彼女は貸した消しゴムを差し出した。ほとんど角の減っていないそれは、紙のケースから一センチちょい頭がでている買ったばかりのものだったが、今はそのケースから出た部分のゴムに亀裂が入っていた。貸す前には無かった傷だ。ケースとの境目辺りに深々と切れ目が出来てしまっている。

字を消そうと紙に当てて力を入れた際に、めきつといってしまったのだらう。よくあることだ。それに、その消しゴムは外国製で信じがたいほどの安物だった。

「す、すみません」

ちよつと泣きそうなんじゃないのか——そう思えるほどにその声は震えていて、焦っていた。

「いや、いいよ、そんなの」

まとめ買いした安物だから、代わりもあるし、一個くらい、と俺は言葉を返して、尚も申し訳ない顔のままの彼女に続けてこう言った。

「ちよつとそれかして」

ひょいと消しゴムを取って、俺は亀裂をぐいと広げた。あっさりゴムは切れて、大小二つの消しゴムになった。

小さい方を彼女に差し出す。

「はい。消しゴム忘れた、ってさ、今日一日無いんじゃないでしょ」

一瞬呆けたようになってから、彼女は控えめに右手を出して白いゴム片を受け取った。

二日後、彼女は俺に小さな文具屋の包みを渡してきた。中には、プラスチックケースに入った、俺の外国製の安物とは比べ物にならないくらいきっちりとした消しゴムが入っていた。

そうだ、憶えている。憶えていた。名前も忘れるくらい薄情でもささいな思い出なんていくらかでも憶えている。伊藤と俺が生きていたのは、ああいう日常だったはずだ。

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎Ⅱおれたちのどうでもいいこと

その八

商店街のいたるところでハルカと俺は偽物の心臓をちらつかせた。単純で馬鹿馬鹿しいその行為に、俺は少しばかりうんざりしていたが、ハルカは確信的な、はつきりとした表情のまま淡々とそれを行っていた。

防犯用に、商店街のアーケードや店内に無数に設置された機械の目が、俺たち二人を赤い風船と一緒に見つめた。その映像データは、ネットを通じてどこかのディスクに保存されたり、あるいは店舗内のコンピューターに一時間だけ保存されてすぐに消えたりした。無秩序に広がり、保存され、チリとなる。

そんな工程の中に、本来あり得べきでない盗み見という項目が紛れ込む。それこそが、犯人の行いであり、恐らくは俺とハルカの追う人物の行いだ。

すべての準備が終わって、俺とハルカは二人でふらふらと商店街を彷徨って時間を潰した後、伊藤が死んだ現場に戻った。そこで、俺たちは真夜中まで二人で黙って佇んでいた。

気がすっかり消えた頃、ハルカは唐突に俺に向かって手を差し出した。ほっそりした手の中には、奇妙な塊があった。くの字型のシンプルな金属の塊で、飾り気のなさが冷たい気配を放ちまくるもの。

なんとも分かり易い、拳銃だった。

「これ、もつといて」

俺が受け取ると、気だるそうな吐息と共にハルカは付け足した。

「ただの銃じゃないからね。犯人は宇宙人だし」

「……俺が撃ち殺せ、ってこと？」

「撃ち殺してやりたい？」

伊藤春って子を殺した犯人がいるとしたら、そいつを。

わからねえよ、と俺は答えた。本当に、分からなかった。そいつだけを撃ち殺せば良いのか、赤い心臓に関わる宇宙人を皆撃ち殺さなければ気が晴れないのか。

ハル力を撃ち殺したいのか。それともこのまま彼女に寄りかかっていたいのか。

犯人が宇宙人であったことは、今回の事件の不自然さから気づくことができた、ハル力は言う。自殺も自殺以外の何かも疑える要因がなさ過ぎるという不自然さ。そして、石山の自宅の不自然さ。彼の足取りが全く、ほんの手掛かりすら得られずに、追えていないという不自然さ。なにより。

自殺現場から、赤い心臓の消えた不自然さ。

三時を回った頃。

音もなく――吐息や衣擦れの音すらしなかったのだ――一人の少年が姿を現した。石山。失踪した俺と同じ学校に通う生徒。

石山の顔には、表情らしき表情は浮かんでいなかった。ただ、どれだけ洗っても取れない油染みのような疲れの色だけが貼り付いていた。

そいつは俺のほうを見て、少しだけ訝しんだ様子だった。数歩分の距離を空けて、立ち止まる。

「……もう一人は、どこだ？」

俺は一人でその場に立っていた。ハル力はいない。

俺は説明せずに、質問で返した。

「あんたが、伊藤春を殺した？」

はつきりと、相手――石山の中の何か、中核的部分に亀裂が入るのが感じられた。現れた時のまま無表情ではあったが、額には薄らと汗の玉が浮いていた。どこまでも、怯えたり焦ったりしている人

間そのものだった。

「そうだ。俺が殺した」

渋面を作ってそう答えた後、しかし石山はすぐに違う顔を作った。

「いや、違う。前の俺は今の俺ではない」

「前の俺？」

「最も人間に近くなっていた時の俺だ……それは今の俺ではない」

「何を——」

「赤い心臓を渡せ！」

前触れ無く。石山はそう絶叫した。並大抵の大声ではない。背後に立つ大きなマンションでさえびりびりと震えそうな大声だった。叫びを上げた後の彼の顔は、もう渋くもなければ焦りも見えなかった——というか、それらを含めた様々な表情が入り混じり、まともな一つの状態を成してはいなかったと言うべきか。

それは多分、狂気そのものであり、または宇宙人の浮かべるべき顔でもあった。

突然の異様な感情の発露に驚き立ち尽くす俺に向かって、石山が迫る。見たところ何も危なそうな物——釘バットやメリケンサックなんかは持っていないようだったが、安心はできない。

何せ相手は宇宙人だ。俺は咄嗟にポケットに隠し持っていた、ハル力に渡された銃を取り出した。しかしそれを前に向けるよりさきに、石山指先は俺に届きそうだった。

「心臓を——」

虚ろにその言葉を繰り返し——そして次の瞬間には、石山は派手に転倒していた。

マンションの屋上に潜んでいたもう一人の宇宙人——ハル力の登場だった。十三階分をためらいなく落下して、その勢いを地面ですれすれで直覚に折り曲げて体重と共に石山に爪先をぶつけたのだ。

物理法則も何もあったものじゃない。重力を折り曲げ、地面に伏した石山を宙に放ると、その上方に自分も飛んで、肘を叩きつける。たまらずもう一度落下した彼の背中に遠慮も糞もなく片足を下ろし

て、ハルカ自分も地面へと降り立った。

「ここにはないよ。残念だったね、石山君」

ハルカは、満足げにそう言った。目を見開いて、信じがたいといった顔をしたまま、石山は低いうめき声を挙げた。憤怒と共に手足を動かす素振りを見せる――が、すぐにハルカが察知して、右手と左足を立て続けに踏み抜いた。嫌な音が俺にまで聞こえてきそうだった。

「教えてもらおうか」

苦痛を与えながらハルカが恫喝する。

「なぜ伊藤春という人間を殺したのか。実のところ、犯人が君であるところまでは分かって、そこそこだけは私も知らないままなんだ」

たつぷりと時間を空けて。石山の荒い息の音だけが暗闇に何度も響き、その後彼は観念して告白に移った。しかしそれは――

「おれは……俺は、彼女が好きだったんだ！」

非常に予想外で、馬鹿馬鹿しい物だった。俺はその一言に眼が点になりかけていたが、ハルカの方はむしろ当然という顔つきだった。

「宇宙人が？ 人間を？」

俺は思わずそう訊いた。

「春日野君。こいつは、宇宙人でありながら、宇宙人ではないよ」
ハルカが説明を付加する。

「監視者の目を逃れる為に地球人に似せて作られた人間の模造品。どこかの宇宙人が作った、『赤い心臓』探索用の自動人形だ。そうだろう？」

石山は、無言だった。しかし、その無言はほとんど肯定の意味しか持っていなかった。

「地球の生き物になりきるってのは……」

「そう。君が見た通りのことだよ。見た目を始めとした様々な特質を真似る。この石山がモデルケース」

ハルカの足元に倒れている男。俺と同年代の、どちらかと言えば少年といったほうが適切かもしれないそれ。どこからどう見ても外見的には人間そのものであるそれ。

「最初から、こうではなかった……」

石山がたつぷりの悔恨と共に吐き出し始める。

「意識構造も、肉体も、最初はこうではなかった。俺は人間の精神構造をろくに理解できなかったし、肉体にしてもそれらしい形を真似るくらいだった。だが、時間と共にバージョンアップが行われる。俺はそういう風にできているんだ」

「どのくらいの時間、地球に？」

ハルカの問いに、彼はぎろりと眼球だけを彼女に向けて睨みつけ、答えた。

「百五十年」

「百五十？」

俺の生まれる前。親の生まれる前。原爆も電子レンジもなかった時代。遙か過去。

「孤独に歩み、ひたすらに探していた。だが心臓は探索者から逃れるかのように、位置を変え続けた。俺を含めた多くの探索者は、結局今の今までそれを手にすることは出来ずにいた」

百五十年、石山は彷徨い続けた。だがそれを彼は――

「おれは、しかし、見つけた。あの伊藤春という少女の手の中に、見つけたんだ」

情報を、記録を操り、潜入した先の学校で――。

「すぐに奪えばよかった。殺してでも何でも良い。だが、俺は、そのときの俺は、数え切れないほどのバージョンアップを経て、人間そのものといえるほどに人間に近いものになっていた」

元々単なる自立端末――監視者に見つからない為にアナクロな方法で心臓を捜すための――が、人間そのものにまで変化していた……。それは、ひどくグロテスクなことではないか――？

「その時既に君は、人間に近い存在になっていた――その上、赤い

心臓の持ち主である少女に懸想していた……」

と、冷笑を崩さずハル力。

「……心臓を、盗むこともできた。それこそ数え切れないほどやり方はあった。だが俺は彼女と親しかつたし、俺は彼女により深い関係を迫るつもりだった。その後で、心臓は貰い受ければ良いと思っていた」

どんどん話がおかしな方向へ行っているような気がして、俺は一つ身震いした。夜の冷たい風が背中 of 皮膚の下まで入り込むようだった。

その赤い心臓の持ち主は――

「伊藤春は、だが、俺が何かを告げるより先に、別の人間に好意を告白した」

俺に、あの日美術室で。

「とんでもなく俺は懊悩した。ほとんど狂いかけたと言っても良い。失ってはいけないものを失った感じがした――」

「どうして殺した？」

冷静且つ冷徹な詰問。ハル力はそれを緩めなかった。

「分からない。何か明確に理由があつたわけではない。ただ、俺は絶望していた。百五十年かけて人間そのものになつて、そこで得たものが『喪失』だと言う事実。伊藤春は――彼女は、気がついたら死んでいた。彼女の家の中で」

「家の中で？　ならなぜわざわざ落とした？」

「俺は彼女に手も触れずに、殺したんだ。長らく隠してきた、人間のものではない力で。隠さなければならなかった……」

「監視者への偽装工作か」

地球にない文明、地球の生物が持たないはずの力。外宇宙の生物の干渉を、監視者は嫌う。

「気が動転していた。彼女を落として、その不自然な肉体の損傷を隠して室内の痕跡を消してマンションの共同玄関のカメラ記録まで改竄して、しかしそこまでやりながら俺は心臓を回収できなかった

――
俺の目の前で、消えたからだ。転がる小さな赤い風船が、いつの間にか。

告白すべきことは全てしたのだろう。事件の全貌は、あっけないほどに明らかになったわけだ。

沈黙を挟んで、ハル力が呟いた。

「今も、君は人間に近い存在のままかい？」

それに対して、石山はすうっと唇の端を吊り上げて、笑って見せた。

「今の俺は、違う。意識構造を少しだけ変えた。もう俺は、伊藤春の死を悲しまなくて良い。意識のありようが変わって、俺の根底にある倫理や価値も変質した」

「変質？」

「……寿命を持つ生物は、死と生を根底に置いた倫理を持つ。もし彼らが無限の生命を得れば、生や死を条件に持つ倫理は消え去る。

彼らは全く別の倫理を持つ生物に代わるだろう――そういう変化だ」

いやに嬉しそうだった。先ほどまで苦しみと狂気に彩られていたはずの石山は、今この瞬間にもどんどん変化しているようだった。

「最初からこうしていればよかった。俺が変化すればよかった。今のままで苦しいなら、苦しくない感覚を持つ生き物になれば良い。

意識や記憶を変えられるならば、状況に意識構造を合わせれば良い」

好きであつた伊藤が自分になびかなかった事実が、そして彼女を殺した事実が苦害の元ならば、それを苦界と受け取らない精神構造を持つ生き物になれば良い。

「環境適応、だ」

かつて人間を全く理解し得ない宇宙人から、人間に近い存在に変わったように。

たつぷり時間をかけて、石山は恍惚とした表情へと変わっていった。喜びや開放感が彼の中で溢れていることが外見だけで嫌ほどわかった。

「今の俺に残っているのは、赤い心臓を捜すという、その目的意識だけだ」

俺は、迷わずに銃を持つ手を彼に向けた。

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎Ⅱおれたちのどうでもいいこと

2 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎Ⅱおれたちのどうでもいいこと その九（終）

この事件の犯人は、宇宙人。原因は、超文明の塊。反抗の理由は、痴情のもつれによる突発的感情の発露。人間より高度な技術を有した犯人の犯行のため、その偽装工作のレベルは高く、地球人の警察にも誰にも見抜くことが出来なかった。伊藤は宇宙人に殺され、完璧に偽装されて自殺者として処理された。

引き絞る

宇宙人の体が跳ねる。立ち上がることも出来ない石山は、肩に大穴を開けられて信じられないようなうめき声を上げた。金属と肉と一緒に火にかける異様な臭いが鼻をついた。ハルカは発砲を察知して事前に飛び退いた。

伊藤は自殺じゃなかった。彼女は自殺なんかしていなかった。自殺する理由はなかった。つまり、あの日俺に向かって告白したことに、偽りはなかった。

本当に？ 誰も彼女自身になれるわけじゃない。その内心なんて、誰が確定的に語ることが出来るだろう？ あの日のことが気まぐれや何かでないと、誰に言えるだろうか？

俺は、事件の謎が明らかになれば全てが分かると思っていた。全てがわかって、俺は気分が晴れるだろうと。だが、今あるのは強烈な寂しさだけだった。彼女がどこにもいない、寂しさ。

俺はずっと自分が知りたいのは彼女の本心だと思っていた。つまり、彼女は本当に俺を好きだったのかということだ。だが、ちがう。

ちがう、そんなことじゃなかった！

俺は、知りたくなんか、なかったのだ。

少なくとも、事件が自殺かどうか疑い続けている間は、その謎が立ちふさがっている間は、ハルカと共にあてもないこうでもないと彷徨い続けている間は、直面しなくて良かったのだ。謎がある間は、伊藤の死自体がばやけていたのだ。俺は、伊藤の死を、味わいたくなかったのだ。俺は彼女が俺を好きだったかどうかを知りたかったんじゃない。

俺が、彼女を好きだということを、直視したくなかったただけだ――彼女が死んだという事実と共に。

夕日色の美術室。高い身長。控えめで綺麗な声。不器用な告白。頬の赤み。たった一度の告白。俺は相手の名前をその時咄嗟に思い出すことができなかった。それまでもよくあったはずの相手。それでも、俺は多分、あの瞬間に、付き合って欲しいと告げられたその時に、伊藤を好きになっていたのだ。

俺は、だから、恥ずかしかったのだ。あの時あの場で告白に返答しなかったのは、俺が対人関係に二の足を踏む性格だったからじゃない。

俺が彼女を好きになったから、俺が彼女に答えること、告白を返すことが恥ずかしかったのだ――。

伊藤春はもういない。壮大で遠大な、宇宙に生きる知的生命たちにとっての重要な争奪戦に巻き込まれて殺された。

いくつもの種族の行く末や、人類の未来を大きく決定付けるかもしれない事件。

クソツタレな馬鹿馬鹿しい事件！

宇宙人の都合で伊藤が死んだ。もうそれだけで、俺は宇宙に生きる知的種族の全てに心のそこから価値を感じなくなった。

ばかやろう、と何度も呟きながら、俺は引き金を引き続けた。宇宙人のハイテク銃は何度でも弾を吐き出した。そのたび石山は震え、削れ、千切れた。

いなくなればいい。宇宙人なんて。人間らしい宇宙人なんて、一人も残らず消えてしまえば良い。皆、例の「監視者」とやらのように、人間には想像もつかない高度な存在にでもなっていれば良い。人間らしさに満ちた地球になんて来なくても良い。

肩で息をつく。腕は疲れて汗が伝い、銃身はほんのりと温かくなっている。石山はぼろきれになって死んでいた。

「もう、いいだろう」

後ろからハル力が、俺の肩に手をかけた。

俺は振り返ると、落ち着いた表情のハル力の肩を逆に掴んで引きずり倒した。そのまま彼女に渡された銃を彼女自身に突きつけた。

「どうして」

掠れた声が喉の奥からせき止められずに流れ出した。

「どうして、一緒に犯人を、真相を、突き止めようなんて、したんだ」

ハル力一人だけでも、充分だったはずだ。たった一人で警察の機密情報を盗み出せる宇宙人なら、俺の手なんて借りなくて良かったはずだ。

どうして真相を究明する必要があった。ハル力自身に何の得があった。どうして俺を巻き込んだ。こうして最後まで事件を突き詰めなければ、俺は気づかないままですんだかもしれないのに。自分が失ってはいけないものを喪失したことに。

「そんなに、赤い心臓とやらが欲しかったのか」

声を搾り出きると、彼女は力の抜けた——諦めだけを集めて固めた顔をしていた。不思議なことにそれは、笑顔にも見えた。

地面に倒れたまま、彼女は俺に手の平を差し出した。その中には、いつからそこにあったのか——赤くて小さな風船があった。

赤い心臓

ただの風船ではない。何故か、それは見れば分かった。
ハル力は、既にそれを持っていた——？

「なんで……？」

「監視者は、地球上での多種族の勝手な行為を許さない」

それまでのハル力が嘘のように、まるで別人のように、大人びた口調だった。

「それは、監視者が、人類が人類自身の選択や能力や意志だけでどこまで進めるのかを見極めたいからだ。死に追い立てられ、病に悩み、喪失を抱え、矛盾に苦しむ未熟な種族が、どこまで幸福に到れるのかを」

「人類自身の……？」

「そう。機械生命にすら未だ形態変化を遂げられず、自分自身の存在の形式をそのまま受け入れて生きるしかない種族を、観察してんだ」

穏やかに言い放たれる。観察していた——人類、を？

彼女は俺に事件の説明をする際、「監視者」なる存在の行為の目的は謎のままだと語った。他の宇宙人はただ監視者の強大な力の秘密を求めたのだと。

俺はハル力の瞳を真っ直ぐ見つめた。何光年も先を見通すような透明な瞳がそこにあった。

「お前は……ハル力は、一体なんなんだ」

「宇宙人で」

それは既に聞いた。続けてハル力は、口にした。

「監視者の、一員だったものだよ」

宣言すると、彼女は俺の手に自分の手を重ねて、引き金を自分で引いた。

発砲の音と衝撃に俺がびくりと震えると、その一瞬で彼女の姿は消えていた。丁寧なことに、石山の死体も。

誰もいなくなったその場所に、ただ一人俺は取り残された。
目の前に、赤い心臓が転がっていた。

*

こうして俺は、一人に戻った。激動の数週間を乗り越えて手にしたものは、何のことはない、ただの日常だ。人が蠢き、その中には宇宙人も潜んでいるかもしれない、危うい日常。

自分の想い人が、いつ死ぬとも知れぬ日常だ。人は宇宙人に殺されずとも死ぬ。喪失はそこかしこに腐るほど転がっているはずだ。

だが、決定的な喪失を経験した人や、それを意識してしまった人は、どれだけいるのだろう。

俺は、表向きこれまでと同じ生活を繰り返しつつも、自分の生きる世界が後戻りの効かない変質を遂げたことを感じ取っていた。

いつもと同じ景色に感じる何かが少しだけずれる。色や香りや手触り、それ以前の気配。

伊藤春がいた世界の気配と、いない世界の気配。

俺は夕日の差し込む美術室で、手の中の風船を弄んでいた。赤い心臓。宇宙人達が喉から手が出るほどに欲しがる超文明の塊。

ハル力は、既にこれを所持していた。あの自殺があったとき、赤い心臓が消えたのは、何のことはない、ハル力が持ち去ったからだ。彼女は恐らく警察官か何かに扮して、赤い心臓を回収することに成功した。

つまり、順当に考えるならば、ハル力が心臓を狙う宇宙人の一人だったとしても、あるいは彼女自身が言ったように「監視者」なるものの一員だったにせよ、あの時点で目的は達していたのだ。石山を探して制裁を加えることだって、何も絶対に俺が必要だったわけではないだろう。俺は今回の捜査で、彼女に学校や町を案内したただけだ。そんな案内がなくとも、ハル力は一人で探し出すことができただろう。

何故、俺の前に現れたのか。

それは分からない。あの日消えたハル力は、二度と俺の前に姿を現していない。

俺は、美術室の大きな長机の上に、赤い心臓を置いた。夕日を受けて、見た目ただの赤い風船であるはずのそれは、とてつもなく美しく輝いていた。

何となくその美しさが寂しくて、俺は赤い心臓を再び手に取ることはせずに、美術室を後にした。

そしてその後、二度と寄り付かなかった。

無理矢理に予想して見せるなら。地球上で、監視者の定める監視のルール——つまり、地球文明を越える文明を使うことを許さず、また地球の生物以外の地球への干渉を許さない——に引つかからないようにする為に、宇宙人たちが取った作戦が、ヒントになるのではないか。

石山のように、人間により近い存在になれば、宇宙人本来の機能や能力を失う代わりに、ただの人間のふりをして、監視者の目を逃れることができる。

人間に近い存在になる。それは何も、今回の事件で言えば石山に限った話ではなかったのではないか。

ハル力を、最初会った時俺は、ただの少女だと思っていた。

それほどまでに、彼女は人間そのものに見えたのだ。

彼女が俺に声をかけた理由。わざわざ俺と捜査を行い、二人して犯人に対面した理由。

彼女は、知っていたのではないか。最初から、俺と伊藤の関係を。それに、俺の、俺自身気がついていなかった部分までを含めた内心を。

知っていて、俺を手助けしたのではないか。納得できない事件が、人間には解決できない事件が、宇宙人の手で起こされた。泣き寝入りするしかなかったはずの俺を、彼女は助けたのではないか。

宇宙人であるはずのハルカが。宇宙人でありながら、人間に近い存在であるために。

——第二話 夕日告白長身彼女宇宙人自殺風船事件謎Ⅱおれたちのどうでもいいこと 終

3 コスモブロッサム

コスモブロッサム ―― その1

春がその顔をのぞかせる頃。風は一週ごとに冷気を減じ、町行く人々の顔から陰しさが消えつつある頃。

神山 守は初めて自分以外の人の家族に切実な殺意――それに近い敵意を覚えていた。

（死ねば良いんだ）

暖かさが近づいているとはいえまだまだ日中コートを手放せないくらいの寒さが残っている。夜は冬の昼間並みに冷える。その年の三月末は、特に寒さが厳しく、冷夏ならぬ冷春だとテレビのニュースや新聞は騒ぎ立てていた。

しらけた光を寂しく散らす街灯が規則的に立ち並ぶ道を守は自転車ですべていた。大きな都市に比較的近い街だったが、大通りを離れればすぐに人通りが減り、また、住宅街の間には広い田畑も残る、そういった街でもあった。

彼が目指しているのは、私鉄の小さな駅だった。大型のショッピングセンターが聳えるメインストリートから西へ向かう、いまだ古民家の残る古い住宅街と海岸沿いの工業地帯の間にある駅。そこへ向かって、真っ黒なアスファルトの上を滑るように疾走する。小さな洋品店や周りの木造の家々に似合わないコンビニの横を通り過ぎて、走っていく。辺りに人影はなく、ペダルを踏み込む掠れた金属音だけが綺麗に響いていた。

顔に当たる風は切れるほどに冷たく、ただでさえ穏やかでない守の心を一層掻き乱していた。寒くて辛い。自転車をこぎ続けている為に息も上がっていた。だが、この夜の暗さと寂しさの中最悪の状況で駅に佇む少女の姿を思い浮かべれば、自分の寒さや苦しさなど問題ではなかった。

やがて——駅の明かりが見えた。駅舎の中から漏れる光の影に、いくつか緑色に塗られたベンチが置いてある近くには自販機が並び、低い機械の唸り声が聞こえてくる。

そのベンチに、少女が一人座っていた。

「瑞穂！」

守がサドルに跨ったまま名前を呼ぶと、少女ははつとして顔を上げ、驚いた顔を見せた。その驚き顔は見るうちに泣き顔へと変わり、そしてさらに弱い笑顔に変わった。

叫びだしたいほどに怒りが溜まっていたはずだ——守はしかし、自身のうちのその怒りが急速に萎え萎んでいくのを感じた。

代わりに感じたのは、どうしようもない自責の念と、悲しさだった。

彼女がここにこうしているのに、今ここに二人でいるのに、そして二人とも間違いなく同じ大切なことを知っている、感じているはずなのに、その彼女の今の気持ちや記憶や意識や思いにどう触れば良いのか。どのようにして救い、手に取れば良いのか、それが少しも分からなかった。

どうして別々なんだ

彼は少女の前で自転車を止めると、澄んだ空気の向こうの夜空を見上げた。空気は澄んでいても、工業地帯の明かりのせいで、真っ黒いはずの夜空は薄く赤みがかっていて星はほとんど見えなかった。（死ねば良いんだ）

彼女の両親も、自分の母親も。この自分達が抱える切実な思いを忘れた人間は、皆。

しばらく黙って佇んだ後、どちらともなしに、行こう、と言ってその場を離れた。守は、そのとき十三歳だった。十三歳で、初めて家出をしようとしていた。

十三歳までの十二年間。たったそれだけの、短く長い時間を、守と瑞穂は微かな憧れと、いくつもの諦めとによって生きてきた。

瑞穂は守が小学三年のときに、昔から彼が住む街の彼の通う学校に転校してきた少女だった。それから三年間、人学年に五つもクラスがあつたにもかかわらず彼らはずっと同じクラスで過ごしていた。最初に彼女を見たとき——と、守は回想する。

彼女の視線の動かし方や、落ち着いた眼差し、大げさにはしゃいで騒ぎ立てる同学年の誰もが持ち得ない静かで寂しげな所作の数々に、彼は気がついていった。瑞穂は新学年を向かえ活力に満ちた教室の最前に立つて、自己紹介を行った。綺麗に磨かれた板張りの床に、小さな彼女の靴が窓からの陽光を弾いて散らしていた。

転校は初めてです。皆とこれから過ごしていくことについて、少しだけ緊張しています。大人びた口調で言つて、黒板の前から守の斜め前の席へと移動して着席する。

その間、彼女は多分誰も見ていなかった。新しい学校の新しいクラスメイト二十七名を前にして、彼女はしかし誰の方も見ずに、ただスムーズに自分の席へと向かつたのだ——それをはつきりと守は覚えていた。

そしてその時彼は彼女が自分と通じるところがあると、ぼんやりと感じていた。彼もまた、新しい学年になって新しい教室に入ったとき、張り出された座席表を見た後誰のことも気にせずさっさと自分の席に着いたのだ。

教室の墨に置かれたクラス内専用の本棚の中の漫画や、ロッカーの上に置かれた水槽の色、グラウンドに入り込んだ犬など全てに色めき立ち輝かしい瞳を向ける同級生達。明るく元気で、息の詰まる問題と言つたものを肌で感じたことのないクラスメイト。

彼らに守はずっと、少しだけ憧れて、大いに諦めていた。

守には人並みに多くの友達がいた。彼は友達を心底友達であると認めていたしそのこと自体には満足もしていた。

だが、友達であつても、それは『自分の味方』ではなかった。助けは来ないと、ずっと一人で考えていたのだ。

中学に上がり詰襟を着て少しだけ大人になったような錯覚を皆が味わっていることを、守は不思議に感じていた。自分はずっと前から変わらず、大人でも子供でもないと感じていた。

制服に身を包み自転車で下校するようになって、特に何が変わるというわけではなかった。二階建ての自宅の玄関の真つ黒いドアに手をかけて開くと、家具の微かな木の匂いと、きらきらと舞う埃だけが彼を出迎える。手に提げた鞆と、夕飯の材料が入ったバッグをとりあえず床に降ろすと、全身を幻の倦怠感が襲う。

その時間が、生きているうちに特に辛い時間だと彼は知っていた。薄暗い玄関の壁紙や、鍵をいつも置いている位置に置く時の乾いた金属音。それらがいちいち彼の気分になつとりとした黒い靄をかけようとするのだ。

なるべく意識せずに素早く室内に入り込み、掃除をして、料理をして、風呂に入つて、後は眠くなるまでとにかく本を読む。余計なことを考えないように。

守には父がいなかった。母との二人暮らしは、彼が生まれて一年も経っていない頃から続いていることで、彼は物心がついてからもしばらく他の家には父という役割があるということがあまり実感できなかった。

彼の母は優しくも厳しくもなかった。彼に笑顔を見せることも、手を上げることもしなかった。注意する時は無表情のまま淡々と言葉を吐いた。その多くに、守は素直に従った。それが普通だと彼は長らく感じていたし、平和であるとも感じていた。母は彼に服も食べ物も小遣いも与えたし、小学校に上がる前に一人部屋も与えた。

ある日、何かの用事で二人で出かけた時——彼の母は、ある用事を思いついて寄り道をした。

いつもはあまり赴かない都市部の外れに、大きな墓地があった。霊園と言うのだろうか、ビルや隙間なく家々が立ち並ぶ土地の一角が、信じられないほど広く切り開かれ、そこには墓石だけがひたすらに立ち並んでいた。

嘘のように晴れた空の下で、真っ直ぐに彼の母は一つの墓へと向かった。その墓は他の物より一回り小さかった。難しい漢字が彫られていて、その時の守には読めなかった。

「あなたの父親よ」

彼女は言つと、愛しそうに墓石を指先で撫でた。その時母の顔を見て、守は心底驚いていた。

母は、笑顔を満面に貼り付けていた。口の端が上がり、目には爛爛と明かりが灯っていた。紛れもない笑顔。はじめて見る母のその表情に、守は強い恐怖を抱いた。それほどまでに感情を顕わにする、喜色を覗かせる母が怖くてたまらなかった。それはなにか、『普通ではない』気がしたのだ。

たつぷり墓石に寄り添って佇み時間をすごしてから、母はこれもまた始めて、注意でも確認でも指示でもない、自分の家族の話を始めた。

「康史さんは、私のたつた一人の相手だったわ」

ヤスシサン、というのが父の名前だった。名前の発音一つとっても、母の言葉の発し方はいつもと違っていた。彼女はヤスシサンの美点を多く語って聞かせた。半分は自分自身に話しているようでもあった。

彼と話したこと、彼と行った場所、彼の口癖、彼の仕事。それから、守について触れた。

「私達二人で同じマンションに暮らすことになったの。それはとても自然にそうなって、私達はそのことに疑問を少しも抱かなかった。最初からそう決まっていたのかもしれない。喧嘩は一度もしなかった。二人で毎日一緒に暮らして、それから二年間が過ぎて、気がついたらあなたが私の中に出てた」

墓石に触れ、墓石を見つめたまま、彼女は口だけを動かし続けた。「あなたは私と康史さんの子供。だけど、あなたは康史さんでもないし私でもない。私にとって康史さんだけが大事な全てだった。怒るのも優しくするのも憎むのも愛するのも全部、彼に対してしか意味はなかった。あなたは私と康史さんから出来たけど、それは別に作ろうとして出来たわけじゃなかった。だって私達は二人いればよかったし、それで完成されてたもの。あなたなんていてもいなくても良かった。ただ、自然に二人で暮らすことになったときのように、自然に出来てた」

その部分まで話す頃には、母はいつもの淡白で無感動な表情に戻っていた。

「あなたが生まれる前に、康史さんは死んだ。病気だったわ。あっという間に弱って、すぐに死んじゃった。私も彼が死んで、ぜんぶをなくした。生きてても死んでも何をしてもしなくても、全部同じになった。全部、彼がいない場所で生きること、何もかも。だからあなたを育てても育てなくても自分が生きてても生きなくても良かった。これからもずっとそうだと思う。だから、守、あなたに与えている物もしている世話も全部、してもしなくても良いことだから偶然してるだけなの。ごめんね」

ちっとも悪びれてなんかいない——悪びれることもまた、ヤスシサンのいない場所では意味がないことなのだろうか。

その日は、その話以外に変わったところもなく、いつも通りに食事が用意され、いつも通りに物干し竿から下ろされたばかりのふつくらした布団で彼は眠った。

その時から、自分を支える誰かが一人もいないのだと、彼は自覚した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1661s/>

赤い心臓

2011年5月25日05時25分発行